

松浦記集成

卷ノ一
卷ノ二
合冊

國文書
費條
號

年 月 日



松浦記集成序

夫松浦郡名所旧跡古城古墳古戰場神社祭祀の由来等其
 外旧記古事来歴を考て古来世の治亂身慶の本を知り知
 仁勇三達徳の君容易なるも古今仁義の道行はるれ天
 の福の有難も治道全ふして天祥瑞を下し或は其不徳を
 戒て妖孽を下し天變禍害の兆をぞ古今和漢を参考し其
 吉格悔凶の四時の如く運轉を見るを見て雷風の恒をれ事
 と考へ四徳の元ハ五常の仁の如しと有れハ仁君仁義を
 以て政道の本とし給ふハ天は随ひ永く治道を行ひ給ふ
 所也故に天を畏れ身を慎むハ貴賤とわく行住望卧忘れ
 給ふぬ人道也此の如く時を知り人を知り問ふ事と好む
 ハ大知に至るハ取為也中庸第一章に天命之謂性率性之

七項目：願ヒマス...願ヒマス

- 一、調書ハ丁寧ニ取扱フ...
- 二、書中ノ紙ヲ折ラマシ...
- 三、指先ニ種ヲ付ケテ頁ヲ送ラマシ...
- 四、冊子ニテ汚サマシ...
- 五、鉛筆等ニテ書入レマシ...
- 六、大キナ調書ヲ片手ニ持ツテ讀マシ...
- 七、調書ヲ又讀セマシ...

謂道脩道之謂教と是れ古今萬世に至る人間の道也事永
く言に及ばず天命を稟得て生れ付たる性と云性ハ
即ち天理也天陰陽五行を以て萬物を化生し氣以て形を
成して理も亦賦る是れ於て人物の生各其賦る所の理を
得る也因て是を人間に稟て稊順五常の徳と云即ち仁義
禮智信の徳也是を五性と云其性ハよく率以て行ふを道
と云道ハ路也人々當り行ふ處の路也行住坐卧此路を
踏し行ふ々聖法也後世鄙人といへば此天理を失ふへ
るるも古きを温る新を知へし孟子曰昔者禹王洪水を
抑つて天下平なり周公成狄を兼ぬ猛獸を驅て百姓寧し
孔子春秋を成して亂臣賊子懼る詩曰戎狄是膺荊舒是
懲也と我敢て聖人の時中を當る事多しといへば父を

0791
15縣
16=1

無し君を無しおれハ是周公の膺る所也我れ亦人心を
正し邪説を息め誠行を距き淫辭を放ち天理に順ひ仁義
を本とし時中を履むハ三聖に承ん欲を不者也我豈に辨
を好く言を成す謂れハ此時の中にて聖法を解くハ已
む事を得ざるハなりと故に時を知て天理に悖る道は
履ハ聖賢の事なり然るは治亂興廢盛衰始終其時有る事
皆天に在る所なり故に天理に順ふ者ハ治に居て亂を忘
る事多し左に仁君天に受て下民を子め如く仁政を為
し玉ふハ是れ為也其亂の發し動くつき時は當てハ譬へ
田に在る大人といへば必ともる事能ハる左に道
を行ひ天理に順ふ人と思ひ玉ふ大人ハ先づ時を知り世
の勢を知り其人を知り事肝要也是れ亦阴阳寒暖の天地

間に行るる如く時と其勢いと有るを参考せし是
 四時の運行古今の成敗時務の進退を知へし天の成せる
 生民の中は必ず時は應じて類を出し賢者起る事有り
 天是を生じて君とるし長と成る亂の盡る末に當ては此
 人を生じて其治始り乱臣賊子の争奪も息し其治に入事
 有るも是即時也萬民を導き物各其所を得て業を樂し生
 養を遂る事是即天此人を生し其亂を治る時なる事を知
 へし又此萬民を教て人道五倫の道理正しく行はるる事
 此天心の然るをむる所也然して後天地人の道行はるへ
 し此時に當て大人出て時に隨て仁政を行ひ玉への五百
 年の八百年も其徳の本有る事を知へし此時は堯所謂天
 地を建て悖り鬼神を質して疑なく聖法を考て謬り

治下ニ乱ノ字
 聖ニシテ

則天祥瑞を下ると云ふ此時なる左に其時の勢を私
 に考ふ頼朝尊氏信長秀吉の剛將なる諸卿も人為の私
 にあらず皆天萬民の爲に其治乱運行自然の理を考へ
 知べし然るに乱臣賊子の争奪を止し萬民業を樂むの時
 は来れども唯此道を教てこれに申るは孝悌の義を以て
 し生民の道理を知りて王化四海を行はると云ふ事ハ
 如何なるに是を以て深く考つれば其治典廢天は出る
 事有り其人其勢ひふければ行はれざる事明ら也然る
 に仁君上は出玉ひて其大臣を得玉はまは其道行は
 れば又大人下は在りとつへて其君を得されば行はれ
 ば是其遇を得ざるの憂古今如何とせば此事終る孔子曰
 君子不怨天不尤人と孟子の時道を行はれざるに當て彼

の齊國を去り、ふ道路して其不悦の顔色を見て、門人
堯、虞、問て曰、夫子不豫の色有る、如何、如し、前きの日、虞、夫子
に聞きぬ、曰く、君子は天を怨む、人を尤む、此の玉の如し
如何と云ひ、曰く、彼れ一時此れ一時あり、是れ亦時
を考へ知へしと也、無事の時、天を怨む、人を尤むる事
當然の道也、唯一概の論を極む、凡五百年、必ず王者興
る、おと有り、其間必ず世に名ある者あり、堯舜より湯に至
り、湯より文武に至り、皆五百年にして、聖人出ぬ、一也
に名有る者は、是を輔佐する人出、堯舜の時、臯陶、稷、契、湯
に、其時、伊尹、萊、朱、周の文王、武王の時、太公望、散宜生、の如き
天下、其名を稱する人の出る事、是れ天亂世を平治せんと
欲して、福ひを成せる時なり、周より而來、七而有餘、歲也、其

年數の過ぎぬ、其時を考ふれば、則天の時來るべし、今也
此時、彼の五百年の時、過ぎたれば、亂極之治を思ひ、天に
順て為る事あるべき、今も然るは、一つも為る所
有る事を得ずれば、孟子不豫の色なき事能はざる取也、是
天いよ、天下を平治せんを欲せざるなり、如し、天平治せ
んと欲せば、今も世に當て我を捨て、其を誰とや、吾何為そ
不豫せんや、是不豫を極む時、亦水と也、然水とて、時來り、
る天理を考て、實は不豫せむ、蓋し、聖賢世を憂ふの志と、天
を樂むの誠と、並ひ行ひ、水て天理に悖らざるを見らば、
夫れ、松浦郡にて、考ふ、蓋し、其民の患難、快樂、私なり、其
況、天に在て、人は繫る畏れ、慎むべき也、故に、此古の事を記
して、後、告ぐ、天を知り、時を知り、其勸善懲惡の同じ、

いへとも或は偽威を以て天を畏れ人竟の私を以て法
と賣り或は天理に隨ひ誠教を行はれたる跡を知らん事
を希ひ是全く天に遵ふ者、采へ悖り者、辱を受るの理
を明らかりせんか為し是を記し且夫吾朝應仁より天正
に至り百有餘年の亂世貴賤争奪の心止ま上は天性仁義
の道行はれ下は天性に遵ふの道教は由りて五品
五りたり悖り悖りする所の人の道則ち天は出で此道を履
よざれば天の福ひなき事、辨へば其中は稀に其理を辨
へたる天性俊傑世に出るといへども上は行はれざれば
下は隠れ世は道に浮屠家の容兒を表し假り内心天道
に遵ふの理を窮むといへとも公は行はれざる世に當て
一己の見識に迷る事有りては隠者の説とあり唯書林

の利を得る而已也然とも幸に經傳の滅せざる事、是れ
亦天此人を以て然らしむる後世の福ひ大なる事也由て
彼の乱世争奪の心止まざる時、天は然らしむると云は
んか或は東夷の誹を受るの本と云はん、然るに天は畏れ世に
恥へざる甚しきと考ふ然るに天の福ひを下せる時来り
て東照神君の御徳澤に浴し四民各其業を勤め上先祖に
受け下子孫に傳んと身を慎み用を節ふる者、現在親
妻子を安く養育し其務め怠慢せざれば衣食住の乏しき
事も知らず誠は帝力を歌ふ時、是は益を望まざると思
はれ茲に由て誠は天の道也是を誠とせざる人の道不
る事を粗辨へて治亂の説を成せざる書或は異域を征し
ひし旧事旧跡公武の遺事典慶の次第録せる書民間に

周く渡るや自然と出て来たるも其風化と謂つ然
不_レ天を畏るへき教戒固熟し行_ハ水が水ハ以つと
く奢侈_レ移りて其業を貶_ス者儘出来_ズ人情_ハ常也茲
に至_テ法を懈_テ期_ハ極む天を畏るへき所也左水ハ吾
松浦郡_ニて天正以前亂世の書記絶_テ然し松浦黨の宗
家波多彦没收_シ當_テ村々田畠檢地水帳_ハ類_ハ始_メ兵火
等_ニ滅_シたる所悉く傳へ来_ラ村落_ハ是誠_ニ庶民_ハ大
患吾郡_ハ天災此上_ニ有_ヘき因_テ唐津創造_ハ彦寺澤氏_ハ
代_ニ當_テ元和二丙辰ノ年再檢地_ニて波多家_ハ古高_ニ引
合餘計_ハ増高_ハ出来_テ漸く高免_トなり其貢税_ハ進_ム事是
も亦天_ハ不祥_ト下_ルべき時_ナる_ニ鳴呼_ハ時哉文祿甲午_ハ
妾如何_トも亦_ハ事多_シ又民家諸所傳_ハ所_ハ松浦記_ハ或_ハ

松浦昔鑑或_ハ松浦古事記_ハ肥前風土記等_ハ中_ニ松浦
の古事_ト擧_ゲた_ハ有_リ其家々_ハ書記大同小異無_シし
あ_リ予此等_ハ書の朽滅_セん事_ト愁_テ所々_ニ需_テ是_ト
寫_シぬ其中_ニ疑_ハし事_ハ有_トい_ハとも私_ニ取舍_スる事
天_ハを畏_ルる水_ハ唯時代_ハの事_ト勤考_ハため其書傳_ハたる
儘_ニ是_ト集_メて猶後_ハ識者_ト待_ツ往昔人皇十五代神功
皇后三韓_ノ事有_リし松浦古事記_ニ見_ハ大村鬼ヶ城異國
の監御殿守護交代_ハ人々姓名杯_ハ或_ハ文祿甲午波多家没
收年代_ハ近世_ニて同家十七代相續_シ其間遼瀛_ハ水_ハ
其中姓名混雜_ハ計_リ難_シ又居所_ハ家系古今_ハ遠有_ルも
の武_ハ氏_ハ唱_ヘ祖先_{ヨリ}傳_ハるもの有_リ其居所當時_ハ
地名_ト用_ルるも有_リ或_ハ其家々_ハ印_ハや紋_ハや或_ハ人名訓語

古今有り或ハ俸禄ノ数ニ稻束町教貫石等ハ別有り或ハ光ノ源氏ハ名諱ニ二字有り一字有り是其代々ノ異同有り且法名年号或ハ方今傳々々々寺院ハ号何水ハ僧侶ハ記スル所多シ其真偽誤写ハ計スベクハ代々古書ハ儘ニ出シ置トモ也因テ題シテ松浦記集成トシ猶其序ヲ述ル事爾矣

松浦記集成卷之一

目錄

肥前國圖

松浦郡圖

松浦黨君臣姓名居所

古城

鬼子嶽城

獅子城

神社

諏訪社

河上宮

天山宮

對州領

濱崎

諏訪大明神

御料

大川野

全

廣瀬

聖母大明神

對列鏡
南山

全上 別記ノ付

浮嶽權現

御料
白木

全上 別記ノ付

作禮嶽權現

平之

藏王權現

巖木

若宮上下宮

中島

住吉大明神

平原

熊野權現

唐津
大石

英彦山權現

全

天神社

全

八幡社

全
滿島

七郎大權現

早川
城下

乙宮大明神

全
城中

志々岐山神社

全
津吉

安満岳神社

全
中堅

田島神社

唐津
壁島

佐用姫宮

全末社

唐津大明神

唐津
城中

鏡大明神

全
鏡

鏡大明神二宮別録録起

無怨寺大明神

對列鏡
五反田

無怨寺大明神別録

八幡宮

唐津
佐美

河上山大權現

御料
平原

熊野權現

全
牧瀬

稻生大明神

全
平之

秘室天神

唐津
池原

道祖神

附 豊太閤樂書 田島神社別記ノ付

末社佐用姫宮別記

唐津大明神別録録起

鎮西大明神

唐津 唐房

大山積大明神

郡 浦河内

楠神社

全 楠

佛閣

瑞鳳山近松寺

唐津 西寺町

清涼山淨恭寺

全 新町

一葦山少林寺

全 東寺町

芙蓉山醫王寺

全 里岩

法雲山龍源寺

全 東寺町

天鼓山來雲寺

全 宇木

寶聚山功岳寺

對別 南山

瑞松山妙音寺

唐津 相知

洞源山惠日寺

全 鏡

法幢寺

全 相賀

潮音寺

全 湊

金山海高德寺

全 城下

名古屋六坊

唐津 城下

安樂寺

本寺以下六寺ノ別記ニ卷ヨリ入ル

本勝寺

正圓寺

傳明寺

行因寺

安淨寺

以上六坊

全上別録ニ卷ヨリ入ル

全寺由來書ニ卷ヨリ入ル

全寺別記ニ卷ヨリ入ル

東禪寺

唐律 唐房

教久寺

全 佐志

誓願寺

平正 鏡川

光明寺

全 城下

本成寺

全

彌勒寺

全 田平

談議所

全 城下

卯山寺

全

金棘寺

全

樹光寺

全

雄光寺

全

正宗寺

全

寺跡

琴松庵地藏堂

御料 浦川内

瑞宮山慶龍寺

全 中島

龍谷山瑞岸寺

唐律 徳居

河上山殿原寺

御料 平原

壘石山天沢寺

對州 谷口

玉島山千福寺

全 岡口

興聖寺

全 南山

全寺別記二卷三ノ八

松浦記集成卷之二

目錄

神社

諏訪大明神 別記

一ノ卷 諏訪社ノ次ニ入ル

聖母大明神 別記

一ノ卷 全社記ノ次ニ入ル

浮山嶽 別記

一ノ卷 浮山嶽^權ノ次ニ入ル

田島神社 別記

一ノ卷 全社記ノ次ニ入ル

佐用姫宮 別記

一ノ卷 全宮記ノ次ニ入ル

唐津大明神 別錄録記

一ノ卷 全社記ノ次ニ入ル

鏡大明神 別錄録記

一ノ卷 全社記ノ次ニ入ル

無怨寺大明神 別記

一ノ卷 全社記ノ次ニ入ル

道祖神

一ノ卷 楠樹神社ノ次ニ入ル

鶺鴒殿岩屋 其次
 神島神社 其次
 宗像神社 其次
 鳴神社 其次
 加茂社 其次
 妙見社 其次

寺院

佛閣縁紀問答 一ノ卷佛閣ノ始ニ入ル
 清涼山淨春寺 別記 一ノ卷全寺ノ次ニ入ル
 潮音寺 別記 一ノ卷全寺ノ次ニ入ル
 釜山海高德寺 別記 一ノ卷全寺ノ次ニ入ル

安樂寺 由來書 一ノ卷谷古屋六坊ノ次ニ入ル
 淨稱寺 一ノ卷甘木山甘木寺ノ次ニ入ル
 養良福寺 其次
 醫王山東光寺 其次
 高城山法蓮寺 其次
 内田山淨聖寺 其次
 和多田觀世音 其次
 日生山心月寺 其次
 清水觀世音 其次
 龍谷山瑞巖寺 別記 一ノ卷瑞岸寺ノ次ニ入ル
 奥之坊祈禱所 一ノ卷清水觀世音ノ次ニ入ル
 圓通山常安寺 其次

寶龜山建福寺 其次

右ノ如ク原書ノ掛紙ニ依リテ二ノ卷ハ總テ一ノ卷ニ編入合冊スルコト、
ナレリ

松浦記集成凡例

一 松浦黨君臣姓名居所等其家々ノ書記ニ因テ是を見
ハ大同小異なきにあリ故ニ例ニ朱書ヲ以テ一ニ何
々ときと伝事ヲ記シ或ハ居所不分明成ル有リ或ハ城
中ニ居スと有ルハ鬼子岳城中也或ハ講ヲ記スル有リ
記スル有リ或ハ知行高役名等皆同一且各其居所
と城と唱ふる有リ又館と唱ふる有リ何きし古書記の
儘ニ出之と也

一 神社佛閣の記事縁紀等家々の書記文質疎密之異同を
きこしんば以テ猶集成附録ニ至テ異なる記事及見聞
次第追々ニ書載見ル人参考スルニ是ヲ擧ゲ置クと
也

一佛閣縁記等の中ニ多く方便ノ説に因テ怪異虚偽少
キ云々其當々陰陽五行ノ道に本づルに其方今太平
の

御徳化ニ當テハ信用成リ難キ事多シ故ニ佛閣縁記問
答をなして其治亂ノ世風其當時ノ人情を伺ハんヲ為
ニ是以論して二ノ卷に擧ケ置クレヨ也且西部ノ司
所ノ神社も同ノ参考をレシ

一名護屋城一那姑爺ト云又名古屋又名子屋何且レ書ニ
見エタリ

一唐津城 一漢津城或ハ舞鶴城又白鶴城ト城ノ形鶴ニ

一平戸城 一龜ヶ城又飛鷹城
似タるを以テあり

一深江城 五島侯ノ居城也嘉永二己酉年異国防禦ノ

為脚免許有テ城キ玉ヒ深江城ト云ト也

一鬼子嶽城 一吉峯城又岸無城

一獅子城 一猪子城又岩屋城

一鬼ヶ城 一草野城ト云元神功皇后三韓退治ノ御出張

城後草野中務太輔鎮永ノ居城也又境城ト

モ云

右ノ内名護屋鬼子嶽獅子城鬼ヶ城ハ古墟ト成ル名護

屋鬼子岳獅子城ハ領主侯より年来城番ノ士を付玉ハ

レ也右ノ外廿余ヶ所城ト唱ふる所一ノ卷ニ出書ニ因

テ文字唱エ替ハ吏有リ

一旧跡其外記事之中始書載レヨ記事ノ後見分ニ及ハ次

茅再三追加——の側に別記と書き故に始の文と引
合参考有る

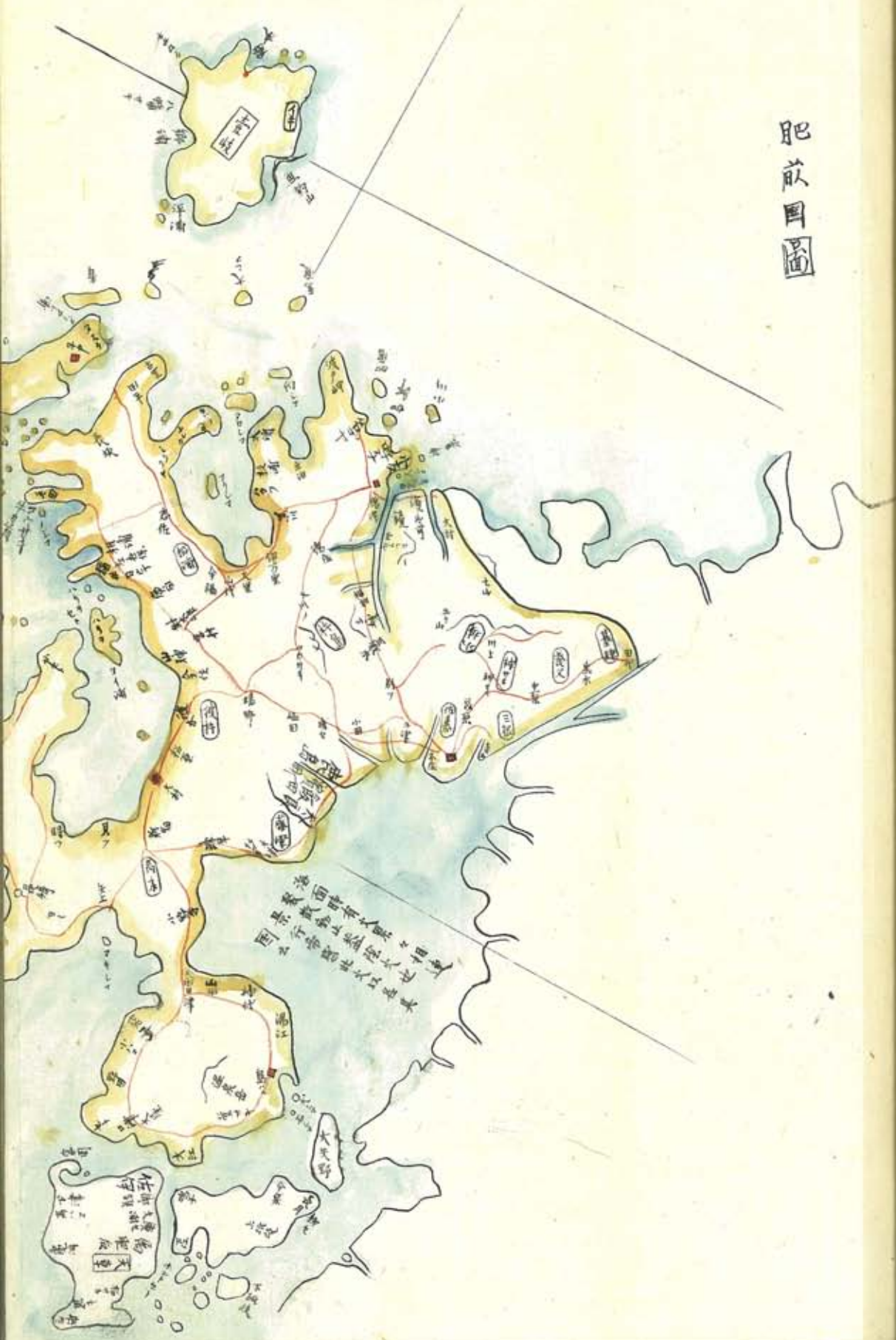
松浦記集成叢端

文化三年丙寅春松浦郡古跡集と成る人事を思ひ立諸家
傳ふ所々松浦記等を探り歴覽をもるといふと遠く
事情信偽を定めかたき事儘有りて可決と古書より由
さ此の尋ぬ處より道程に往々し書記に置る中し文政の末
北筑鞍手郡古門村伊藤真仲常足太宰管内志を思ひ立其
集成九州多く集め揃ふたりし未だ肥前国全備をさる
故丹丘深江簡齋先生へ頼来る先生僕に謂て曰く松浦郡
の取ら汝承持ち集め成りて遠く望み虚敷仕かた
し尤姓名を書し出し九国一同し書例し出き事故其稱号
俱し記を存しと也故に丙寅、年存立時々見聞し入た
る古来の記事を本とし其上諸所へ頼遣し一書と成して

先生へ贈り遣しけり猶其後見聞の条減たるを書載多年
 の草稿と此丙寅の劄記より翌丁卯の記まで二書託し類
 と寄又松浦記集成と題を載せり也

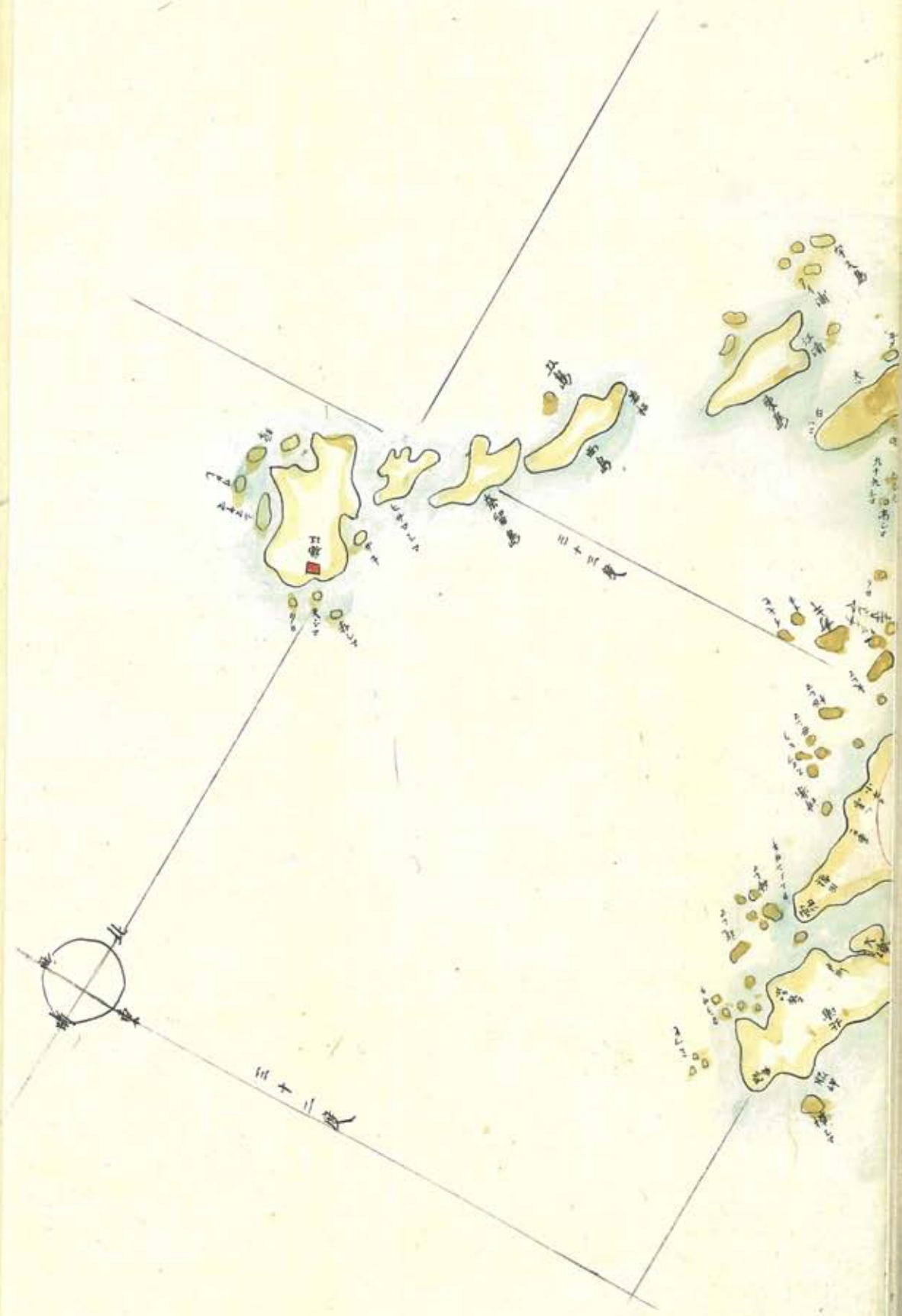
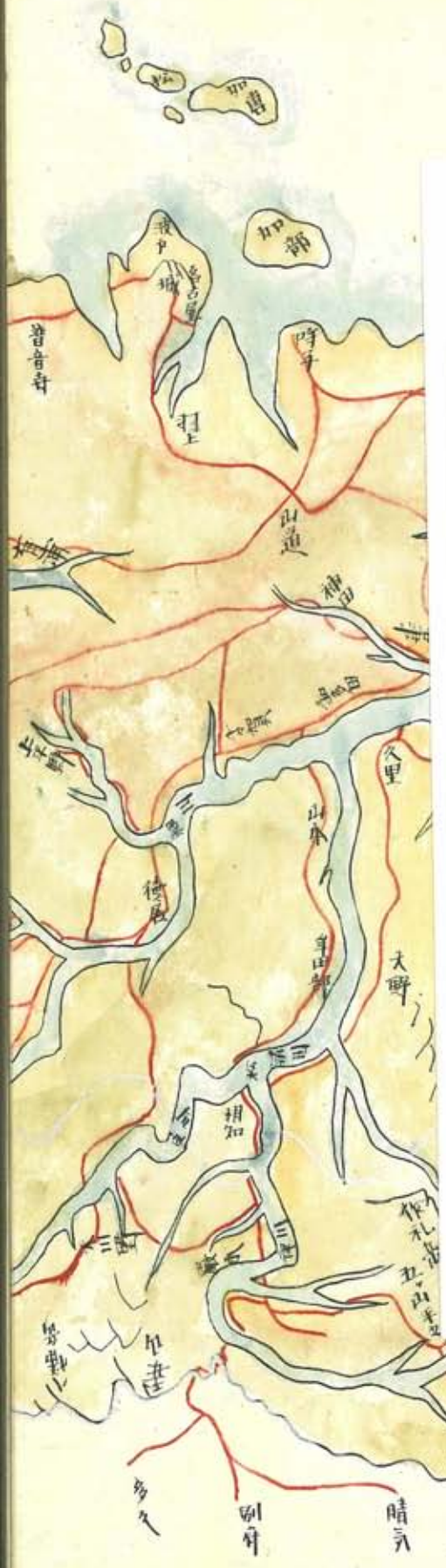
松浦 河東義剛書

肥前国圖

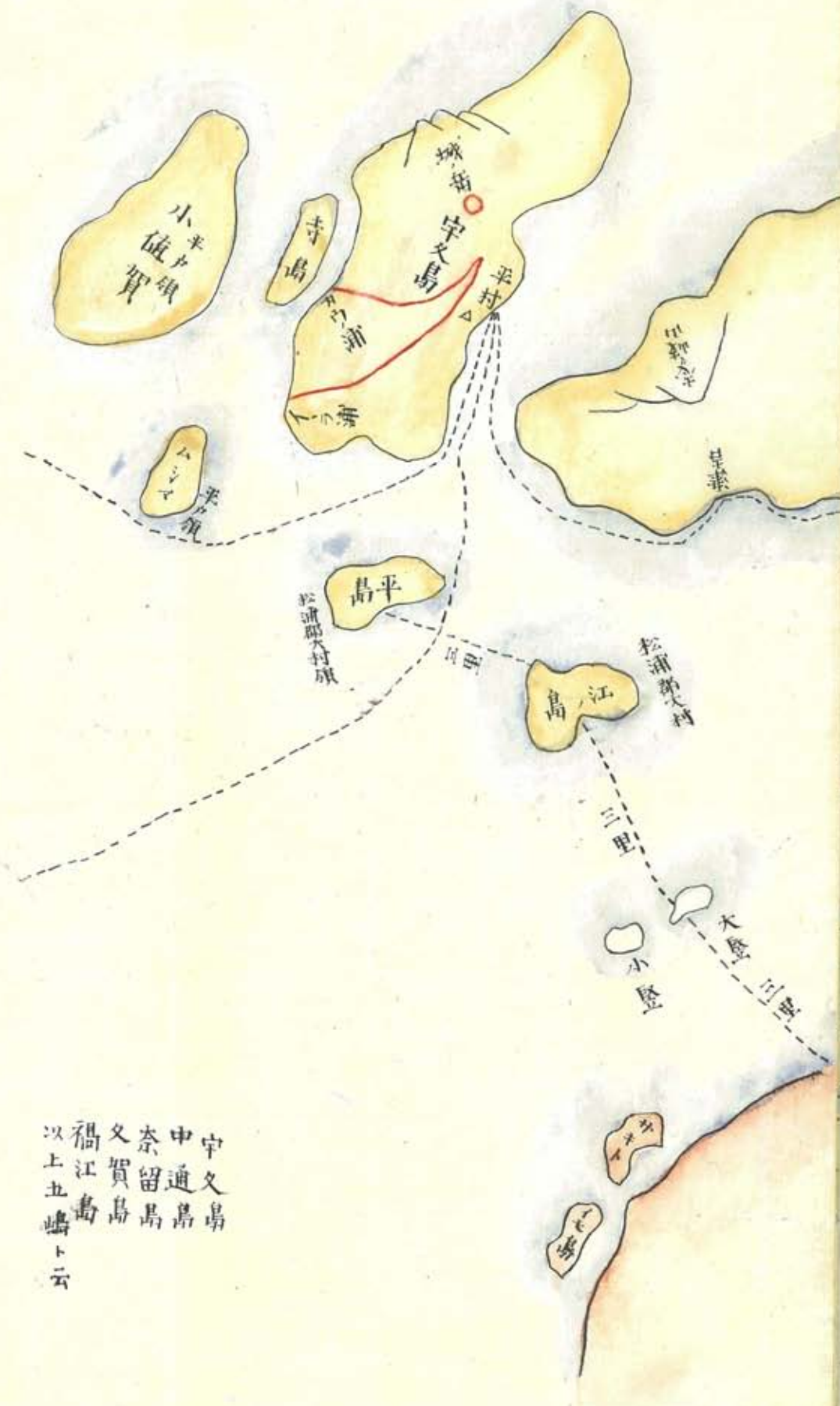
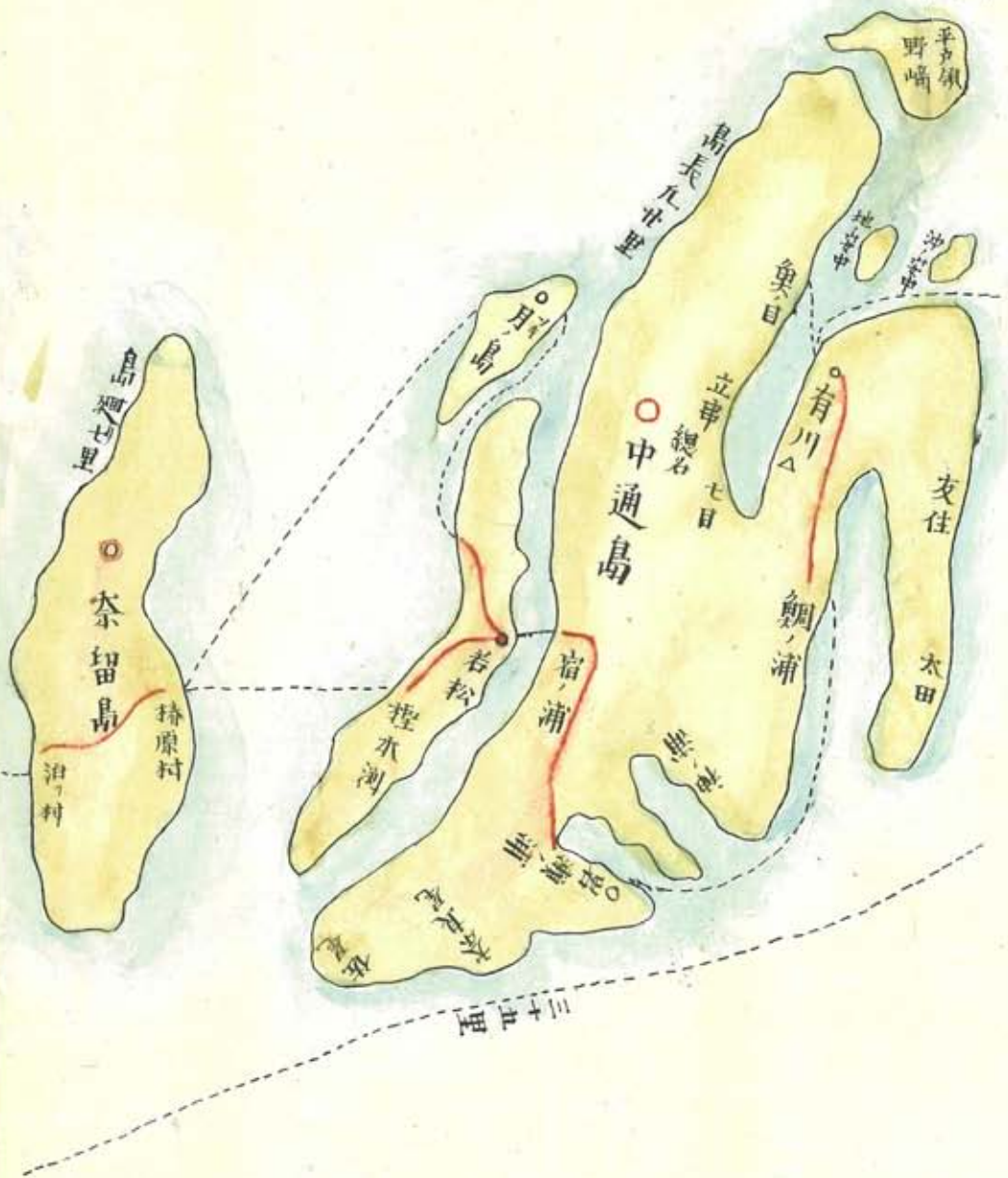


松浦

波多氏峯氏 平戸城主後 松浦四十八黨ノ本家
松浦ト稱ス 二非又漸々大身トナリ上下松浦ノ棟梁ト
長者クナリ ナリタリ本家嫡流ハ今福振谷城主松
 浦丹後守也現今ノ松浦勝太郎即其
 末也松浦大系圖ニ詳ナリ
 附鶴田氏波多家ノ別家末家ニハ牀ス



△印代官町
組



中又島
中通島
奈留島
又賀島
福江島
以上五島ト云

中村安藝守

同

蕨田村

一三

川添監物

用人

重橋村

本城

横田右工門

同

蕨田村波多木家城内

青山采女

留守居
留守將

山本村

青山城

杵島權太郎

同

山崎村

杵島城

井手飛彈守

侍大將
一物大將

安野村

新久田城

土岐伊賀守

同

左里村

伴木近江守

同

蕨田村

保利要之丞

同

竹有村

下條民部大夫

同

鬼子岳本城居

名古屋和泉守

同

名古屋村

八並武藏守

使番
一番足備竹有

伊岐佐村

值賀伊豫守

同

值賀村

馬渡五郎八

同

徳居村

佐志將監
源助
勤

獲下

佐志村

濱田城

有浦大和守

同

有浦村

高江城
高郡

畑津内記

同

畑津村

御嶽城

靄田太郎右工門

同

筒井村

城後城

呼子平大夫

同

呼子村

赤木右近

同

赤木村

塩靄喬衛
喬兵衛

同

塩靄村

世戸左工門

同

和多田村

向三郎武

同

相知村
馬場館

押川四郎八

末月断

押川

峯 五郎 一 丹後土郎

東四方四郎

双水信濃守

寺田新九郎 一 新五郎

鴨打道可

大浦志摩守

隈崎四郎 一 素人

梶山駿河守

大板千太左工門

馬渡源太

徳居又太郎

牟田部七郎右工門 一 七郎左工門

南 源三郎

川原勘四郎

赤木治部大夫

梅崎伊豫守

值賀三郎

飯田彦次郎

西浦源三郎

庄崎次郎

中里主膳

堤 彦六

隈本五郎七 一 三又七郎

中浦平太郎

川西下村

有木村 一 住居不岐

双水村

本家城中居 一 住居不岐

下平野村

大浦村

板木村

梶山村

大板村

徳居村

同村

牟田部村 牟田部館

大川野村 南館一 赤野西館

川原村 一 川原城

梅崎村

值賀村 一 相賀村

同村 一 值賀村

神田村 飯田

同村 西浦居 一 三館

同 庄崎居

中里村

赤木村 一 赤木城

葛津村

中浦村

後賀馬太夫

三田中主親介

洲田勘四郎

原善次郎

大曲和泉守

別記日高和泉守トアリ

畑島主膳

星賀伊豆之丞

田代大炊之丞

一三右一様三河寺代大身也

保利三左衛門

簇奉行

壹岐藤右衛門

村山左京

柴田宮内允

右者山口十五左衛門記録ニ有之

原屋敷村

畑川内村

原屋鋪

立川村

大川野村

一三六曲館

大曲村

畑島村

星賀村

一三田代村簡注

田代村

鬼子岳城中

神田村

三厩

今福

日高下總守盛

右浦村

松尾和泉守

松尾城

米澤四郎兵衛

鬼子城中

下保左攻

同

寺澤倭平圍昌

名古屋村

日高左京治

有浦村

徳居四五郎

徳居村

又太郎前ニヤ同人ニテモ

日高大隅守

入野村

日高甲斐守

中里村

鶴田龜堂丸

山口村

名古屋林四郎

名古屋村

呼子九郎太

呼子村

鴨打新三郎

鴨打忠四郎

牟田部漁四郎

星賀九郎

草富修理

鶴田尋倉

波多津太郎

赤坂治部大夫

切木三良大夫

久多五郎

中山安藝守

木下伊豫守

神吉信右衛門

岩城時左衛門

真名子森之進

力石甚五左門

平田源之進

平岡兵庫之丞

大内多門

隈崎 照

久家祐十郎

畑津左京

木島仁平

飯田次郎

下平野村

同

牟田部村

星賀村

府拓村

高瀬村

畑津村

赤坂村

切木村

以上四人
屋鋪城中ナレベ

屋鋪城中

牟田部村

有浦村

瀧越村

切木村

古川村

木場村

法行城同居

御嶽城同居

杵島城同居

神田村 孝次郎分家

一三間永氏卜書

中山四郎太

中山林八

竹有休九

木山乙祐

寺西百八

平山七八

寺林五郎兵衛

毛利十兵衛

毛利七郎

西村五郎兵衛

寺西四郎三郎

徳居又兵衛

以下居所不分明或ハ城中ノ位ト云

寺田新次郎

寺田新六

寺田新八

○以下兩人參列公配取ヨリ贈リ玉書翰當名中ニ在リ疑ハク居所城中ニ在リ

大田備後守

青木市之丞

川原豊前守 高

杵島郡 武雄ニ任

天正五丁丑辛武雄ニ移ルト在如何ナル故ト云テ知レヌ

伊万里兵太夫 治

松浦郡 伊予ニ

伊万里山代有田ノ三氏籠造寺

山代源六 園

氏ノ仕ハ後鍋島氏ニ仕ヘタリ

補久 山代ニ別ハ

中山四郎太

中山林八

竹有休九

木山乙祐

寺西百介

平山七介

寺林五郎兵衛

毛利十兵衛

毛利七郎

西村五郎兵衛

寺西四郎三郎

徳居又兵衛

以下居所不分明或、城中、住ト云

寺田新次郎

寺田新六

寺田新八

○以下兩人參列公配取リ贈リ玉、書翰、當名、中ニ在リ疑、居所城中ニ在リ

大田備後守

青木市之丞

川原豊前守 高

杵島郡

武雄ニ住

天正五丁丑年武雄ニ移ルト在如何ナル故ト云、知レズ

伊万里兵太夫 治

松浦郡

伊万里

寺田新六及三田也、以、下、甫、止、也

山代郷、山、代、郷、山、代、郷、山、代、郷

山代郷 補久 山代郷 補久 山代郷 補久

有田四郎榮

可

有田郷吉野上住

文祿二癸巳年九月十日於吉野卒法名日秋宗圓俗稱丹後守采

畑參河佐源渡

二千石

致九内葛
印一三星

薙田
畑城居

天草郡四万石郡代

別記源通六孫王經基九代孫トリト名乗一字ヲ見レハ嵯峨源

氏トシ畑參河佐源通其嗣伊豫从秀其嗣葛ノ以光其嗣參河

佐和其嗣渡右五代畑城ニ在リ永享元己酉幸田十五町ヲ差上波

多家ノ臣ト成ル也

右郡代下二代官四人知行八十石宛

天草住

石川宗左工門通秀

坂本体四郎相松

村上久次郎方

江口又一茂和

○大庄屋四人

原太郎左工内

山上九一郎

林源一郎

山本次郎从

○股庄屋而四人

○郡代壹岐藤古工門組下士知行百石宛四人

中村喜代八年度

本山金四郎光政

小川兵从吉村

保田村林八長

○同柴田久内久右同断

神田村住

寺村八郎左工門昌度

平山茂四郎周秀

西浦初四郎年

呼子宗五郎得保

今福郷住

○同世戸左工門右同断

山崎左門圍白

松本竹三郎方呂

和多田村住

林沼郎吉通秀

松浦善右工門信治

○同村山左京右同断

御厩伊勢松寛信

米倉主水長

御厩郷住

和木孫四郎宗原

相田市九郎一秀

醫師八人

石橋白山

西原慶保

森休伯

木下一甫

松原要慶

大浦不白

大林安保

竹原清林

百人鎮下知行現米五十石宛

姓名略之

家譜 = 妻託之

別記三十人

姓名略之 同断

同 十九人

姓名略之 同断

岡本山城守是吉

松浦郡箇井村

城後城

北面百騎司

推古天皇臣大綱言是得末業 紋ニソウ圍子貫クサバミ

前田信之進

田五十町小城郡住

北面組頭五人

組下士廿人宛

松山兵庫之進

田五十町 同郡松山住

同

糸乃島護岐守

田五十町 松浦郡平之山 五ヶ山城

同

宗田佐渡守

田五十町小城郡住

同

山上十五左工門

田五十町 居未分明

同

右、小城郡晴氣城 = 九州探題職鎌倉將軍ヨリ被建置
千葉之ハ其職ヲ司ル五人之五組也後探題止テ封建ト
ナリ其諸士松浦郡 = 在ル者波多家 = 属シ小城郡 = 在
ル者、龍造寺家 = 属ス故 = 此諸士ヲ北面ノ士ト言ヒ
傳エタリ

北面、人々並知行高

○知行三千石 松浦古事記出

山上十五左工門宗元

前田和泉守行春

秀島依渡守政久

右三人ハ北面組頭之家ト相聞タ知或ハ其子孫行前子
記スル知行田數ヲ以テ定ル時ハ郡縣之時分ニ而可有

之其後封国ニ成テ石數ヲ以テ定ルテ年代考ヘシ

○知行五百石高十四人 姓名略之 家譜ニ委

○同 三百石高六十九人 同断

○松浦古事記曰

平之九郎 天品 千石

木下大膳 佐羊 同

毛利五郎九郎 光綱 同

毛利四郎 光亦 同

毛利壹岐守周原 同

平之屋鋪地藏堂棟札ニ毛利五郎九郎魚重トアリ
承応三年庚寅三月亥トアリ

松浦古事記ニ此五將平之郡ニ偶居ニ後世波多家ニ属シ
各客分ノ取計也ト出セリ

私ニ按スニ秀島氏五ヶ山城ニ住居スル一鎌倉將軍以來事ナリ

然ルニ四五代間地名平之ヲ以テ氏トセリ別記ニ見エタリ後
 又秀島ニ復姓セリ左レハ此平之氏ハ秀島氏ナルヲ明
 也家譜ニモ其事ヲ記セリ此五人波多家ニ属シテ客分
 ト云波多家文祿甲午ノ大變以後民間ニ下リ今其跡平
 之山ニ在リ秀島ハ平之ニ教家在リ毛利ハ屋鋪ト云知
 ニ教家アリ此屋鋪ト云則毛利五郎九郎ノ屋鋪也又地
 名栗ノ木坂口岩詰ト云知ニ毛利家教家在リ家ノ紋ニ
 上一ニ三星ヲ用エ木下氏ハ岩詰ニ在リ紋ニ桐ノ葉ヲ用
 エ秀島ハ今平之浦河内廣川其外ニモ教多在リ其紋或
 ハ茶ノ實或ハ鷹ノ羽ヲ用エ其实跡ヲ以テ疑フヘカ
 ス波多家ニ客仕スルノ事代分明ナラザレ氏右郡縣ノ
 職止テ其後ノ事ナルベシ

○古城

- | | | | | |
|--------|------|-----------------|------|------------------|
| 島村城 | 田中村 | 三城主香山寺
寺次公後城 | 甲城 | 三横田右衛門 |
| 杵島城 | 山崎村 | 杵島権太郎 | 波多城 | 葎田村 |
| 三州公山張城 | | | | |
| 松尾城 | 大村 | 古井城 | 青山城 | 山本村 |
| | | | | 三城主香山寺
三州公山張城 |
| 鬼ヶ城 | 大村 | 境城共
草野忠政美鎮永城 | 仕仰城 | 三州公山張城 |
| | | | | |
| 五ヶ山城 | 平之山 | | 小瀬城 | 平原村 |
| | | | | 留守越後 |
| 平山城 | 平山村 | 露田出張城 | 獅子城 | 波岩屋村 |
| | | | | 露田上総 |
| 新久田城 | 井手野村 | 井手野飛騨 | 日在城 | 大川野
川西村 |
| | | | | 露田因幡 |
| 御嶽城 | 畑津村 | 畑津内記 | 姥ヶ城 | 黒川村 |
| | | | | 黒川左源大夫 |
| 本城 | 重橋村 | 川添監物 | 法行城 | 板木村 |
| | | | | 久我玄番 |
| 濱田城 | 佐志村 | 佐志將監 | 高江城 | 有浦村 |
| | | | | 有浦大和守 |
| 名古屋城 | 名古屋村 | | 鬼子嶽城 | 岸山村 |

城後城

筒井村

露田大即右内

石崎城

怡土郡

石崎村

寺沢出張城

魚見城

怡土

加布里村

原田出張城

二重岳城

怡土

深江村

草野長居城

一三 高城山

石志村

城主

八幡坊日解

○鬼子嶽城

吉志嶽共
岸嶽共云

一 岸嶽

重津ヨリ三里已年、方城高十三町余坂道頓所也
曲輪三搦、廻り十丁余大手ヨリ西、向本大ヨリ一丁
下、出水在リ城山四方峻岨山深ク茂近邊山依レ

城門口三ヶ所

大手ヨリ本城迄

楯手水門ヨリ本城迄

大谷城ヨリ本城迄

本丸

東西五十一間
南北九十三間

矢倉敷八ヶ所

二丸

東西百五十間
南北六十三間

此間ニ一、堀切アリ

長五十二間
深十五間

三丸

東西百八十五間
南北六十五間

此間ニ二、堀切アリ

長七十三間
深廿四間五尺

一腰曲輪茶園、平ト云、外有ッ侍屋鋪跡、分明、七、南北八
丁、所也

一本城ヨリ東北、当ッ少シ踏下ッ水、手出水アリ

一城山ヨリ南ニ、当ッ米ノ山アリ、禁川ッす、川ト云

里ニ下リテ東川ト云

一本城ニ御手水場ニツアリ、所々石垣造ナリ、一ノ堀切ヨ

リニ、堀切、追長三十三ト云ニ、九長四丁

一本九長三丁横一丁半、東方ニ三九工門殿、九ト云アリ

一大手佐里、方搦手岸山、方也

一波多殿、籬下、諸士在番屋鋪、佐里村アリ、旧跡申傳多シ

一大手門口馬乗馬場アリ

一佐々木殿屋鋪、云、所、葎田村ニアリ

一波多公、籬下、諸士在番屋鋪、竹有村、山、彦村之内ニ
敷多有之

一安藝殿、坂ト云、所、同村ニアリ、則屋鋪也

一中津町、鉄炮町、流、水、蓮花院、極樂寺、蓮池寺、秘ニ

之坂、同村ニアリ

一馬渡五郎、館、徳、居、村ニアリ、馬渡池ト云、少シカ池アリ

一女郎町、跡、岸、山、村ニアリ、一ニ大門口、檜馬場アリ

一波多家、籬下有浦、大和守、值、賀、伊、勢、守、両人へ、当、国

為、案、内、勢、之、付、名、子、屋へ、残、置、三、州、公、ハ、七、百、五

十、騎、五、百、高、麗へ、出、陣、右、向、人、名、古、屋へ、勢、之、率、ハ、ス
出、陣、故、高、麗、出、陣、外、ニ、見、合、ハ、ス松、浦、刑、部

卿、法、印、三、千、騎、大、村、新、八、郎、千、騎、五、島、若、狭、守、七、百

騎、右、ハ、下、松、浦、三、家、高、麗、出、陣、ト、アリ

私考平戸五島、松浦黨なる一、大村、如何
記有事歟

右之通松浦黨、渡海有之三州公高麗順天山造
責入所々々、討死、纒三百余騎帰陣、向然、
夷太閤名古屋、於て黒田甲斐守、被召波多鎮
ハ名古屋へ船を着せり、海上、直、三河守
の家康、可預との命令有り、黒田承之海上、出
迎上意、趣申渡右、付家康公御預り、夫、常列禁
業山、禁、配流と成る御供、侍横田右衛門其
外下部二人付添配所へ趣、由依之波多家、
一族諸士高麗、勸き手柄、輕重、空敷相成
殊、討死、教輩其功、不立無念成る事言語、

絶、左、此上ハ名古屋御陣、向一太刀怨、
君、恥、思、臣死、事当然、此ハ一同
評議、所獅子城、日在城、而鶴田其外番頭等、云
へる、知今一度鎮公、配所、落、一、獲揚て、一、
怒、止、人、言、任、空敷城、明、渡
室、並、其、初、君、孫、三、郎、嘉、龍、造、寺、送、り、也
然、共、彼、方、終、自、害、由、法、名、等、別、記、下、り
其、後、獲、諸、士、忍、て、配、所、落、し、申、々、人、謀、る、中、無
程、鎮、公、配、所、於、て、御、逝、去、し、由、申、来、り、一、同、力、
落、し、空、敷、浪、々、し、身、と、成、果、る、事、殘、念、也

別記

波多家嫡家三河守二男田平殿松浦判部卿三男日高甲斐守殿四男大村殿
五男五島殿六男佐志殿上有三河守殿故二ツ引而三ツ星ト有り

○獅子城

岩屋村

當城ハ元治承ヨリ文治之間松浦丹後少將源披
公初ラ此処ニ城キ居城トセラル其後孫平戸ニ
移リ玉ヒ跡ハ古城トナル少將之墓ハ城北波瀨
村ノ内ニ在リ又元龜天正之間郡ノ日張城ニ在
之城主窪田因幡守ハ鬼子城波多家ノ別家タリ
シカ東方龍造寺ノ強勢ヲ恐レ東口ノ固メ大事
也ト窪田ノ家第越前守前強勇ナルカ故ニ是ヲ
以テ獅子城ヲ再興ニテ越前守ニ勢ヲ付テ守ラ
シム其子上総久賢ノ時天正ノ始龍造寺ト交戦
ニ敗績セリ

本丸三百坪 山ノ口ヨリ大手迄九町 御番所ヨリ本丸迄十八丁

二丸百八十坪 大手ヨリ本丸迄二丁 往還ヨリ御番所迄三丁

三丸九百坪 山ノ口ヨリ本丸迄十二丁

家中諸士其外家譜ニ委シ爰ニ略ス

○神社

○諏訪社

松浦郡濱崎村

祭神一座 徒御名方命

延暦三年甲子十月二十七日勸請其後大永七年迄七
百四十餘年之間諸記録紛々大永八年戊子六月二日
地頭高階朝臣永勝造管ヨリ今ニ至テ棟書等連續ス



祭日十月二十七日北之嶺神幸アリ

本社 東面 拜殿 籠殿

末社 七宇

大神宮 祇園宮 八幡宮 榎田夜太神

稻荷宮 鷹鳥社 誓來社

石鳥居 兩基 境内千三百八十二坪 古來除地

社家一人 社前在 建武三年ヨリ相續寛文六年以來

吉田家配下當代延五位下 熊本土佐守藤原朝臣次孝

諏方宮古傳記

緣起曰肥前國上松浦郡草野庄濱崎之諏訪大明神者延曆
年中奉勸請所也舊事本紀曰天孫降臨之時大己貴神芽二
子徒御名方命欲拒天孫於是經津主神遣岐神逐之徒御名

方命逃到信濃國諏訪郡迫甚而請曰願得此郡以為父母讓
不為天孫之恩而作我居則吾豈奉背天孫哉因茲經津主神
以諏訪一郡附于徒御名方命是則諏訪明神也神皇正統記
大物主神子徒御名方命美神者事代主之弟也今諏訪明神
是也一云神功皇后征三韓時天照太神託以往吉明神諏訪
明神令為輔佐延曆三年甲子當所近隣於玉鳥里建聖母大
菩薩之社是則神功皇后奉崇所也同時勸請於平原郷住吉
明神於當郷諏訪明神是往古皇后三韓征伐時二神為輔佐
故也以上緣記之

昔者宮殿全備之時地境當作整齊宏麗應仁亂後四隣騷擾
此地為戎馬之衢殿宇廢頽宮地荒蕪而况於簡冊器用乎慶
元之後寰宇一新民庶繁滋然後雖加修造終不復舊貫矣

廿七日為祭日神輿幸于玉島河之下流海濱邑之北境也祭
儀嚴整頗為壯觀近世祀事殘闕僅致如在之竟而猶為郡中
大祀歲時小奠具于年中行事年中行事祀神祕有安鷹患魃
之事古傳曰筑前博多今津加布里及本州唐津平戶等一帶
之地往古殊域海舶之所溪泊也有韓人齊來者一作獻鷹于
當宮一日狩于二本松地名今見鷹擊鳥而下麻小豆胡麻之
圃中為魃被害蓋神愛惜之乎再後濱崎村濱崎浦砂子村之
地山野林藪絕無魃矣若有誤落麻小豆胡麻子者則一夜花
實根株之下忽生魃蛇故土人無栽三種子乃撲刻其鷹形為
神寶寫鷹羽為神紋齊來客死此地祭其靈為末社矣隸屬本
社為末今世不謹之徒誤落三種子而間有遇彼變異者世人之
所識不贅于此魃蛇之害人民為非命之死為終身患為期月

之疾使稼穡失其時者比々皆然近村殊多而夫牙之緣累不
入當宮之產土三村之地芻蕘于他山者偶有包裹魃蛇株中
來落此地即死產子入他村雖有毀傷者無疾痛焉謂神之取
產土人產其是故遠近來乞祠前之清砂而為避魃之符持之
者地者為產子不敢近矣國史所載諏訪明神武神也以經津主武甕槌
之雄而負日神之光天下無不風靡而欲與之決一旦之雌雄
既而感皇澤之深知天威之可畏而歸順焉率群神而為天孫
開國之字先登非全知仁勇者乎萬世列朝廷之祀典為天下
之鎮靈守文護武愛物仁民洋洋乎盛哉赫赫然明我何祈禳
之不應何志願之不得所謂扣之者應洪纖而效響酌之者隨
淺深而皆盈者乎人唯患誠敬之不至而不可患應感之靈矣
夫神砂避魃之一事中古偶有此事而中神之忌諱乃然耳愚

民以為避世之神是豈三測神德之萬一哉然而亦可窺靈威之顯赫矣

附記

正德六年丙申今茲改元享保八月十八日唐津彦土井大炊頭源判實君遊于玉島河便路拜當宮召祠司熊本宮內藤原次利自賜懇詞越廿六日召次利于城中賜金而令奠之後為常例敬仰異于他祠歷利延君利里宏寶曆十三年移封于総州古河土井彦移封之後唐津之邑入為六萬石餘地入縣官後五十餘年文政元年戊寅郡為對馬彦之邑彦之敬神擢于他邦延以當宮為郡之宗祠對馬之為國海上遼遠是以每年使田城総督代拜焉崇奉起于前時對彦之別邑在水州基肆養父二郡者其府為田城総督對大夫然管基肆養父松浦及筑之胎土四郡之封邑者

○諏訪大明神 別記

濱崎村

諏訪大明神と申奉る人王十七代仁徳天皇の御宇に唐土より王任と云官人鷹之獻し奉りし其時迄日本に鷹と云鳥渡りて帝に其事を奏聞しし其鷹は四枚靈鳥と聞けり其請取り渡りて禮儀在座し其古實知る者や有るといふは其禮法知たる者なき故に其由天聰に達し其水に女を出し其請取て女に其禮を知らしめてしんはしりて下脚吟味有ける其頃官女に神功皇后三韓征伐平定したる日大矢田の宿禰と三人新羅國に留置鎮守府將軍の職を給ふ是鎮守府將軍の始也此宿禰の四代子當て大矢田の連と云人の娘也此娘を諏訪の前と云則宜旨有て鷹を受取りし其出て立最花や

々として見へぬ此諏訪の前と申し四八の相を備て類
ひなき美性あり和歌の道は素より諸道に達し禁庭帳中
の官女也壬任の子に誓来と云者鷹を持渡り時作く、思
ふもいかゝる官女に渡り事其たゆまじ直に渡り如
何ありと筭を按き錦の帛紗を掛けて疊の上の鷹をおろ
せり少く跡へ退きひうへたり諏訪の前はしよつて請取
みひかり鷹小のりと云帝御感斜まじに誓来と三年留め
させり鷹の居様古實杯委く相傳せり其内よりい鷹
を鷹仕立日本鷹狩始は諏訪の前を鷹匠の大祖とも
る也三年過誓来帰國の時此松浦より船に乗りける由へ
諏訪の前見送りのため濱崎迄来り給ひぬ此所より鷹匠
濱だくと合事あり麻と小豆を作りたる畑中より鳥を追詰

て入け候を一つの大き蛇出来り鷹をよき殺せり諏訪の前
わし給へ共甲斐に今都に登りて帝に何んと奏せし
や案煩ひ暫く此松浦におじせし御年二十八歳に
て草露と消へ遂にそりぬき給ふ所の者とも歎き悲
し此所に葬奉る都に奏聞しけ此の諏訪大明神と尊崇
は又しと内勅有り則唐土の浦の守護神と祝ふ也十
月廿七日の祭禮あり其後唐土の浦に麻小豆胡麻を作れ
は蛇出生るると也蛇と麻小豆と憎ませむ故成るへ
し此所蛇出を鷹狩する人の此大明神を信仰も此の鷹詠
一物とあるとあり佛道の戒め殺生戒も諏訪の二字を唱
ふ水は其罪滅せといひ傳ふ亦此社中の砂を替て持帰り
其砂をぬり置けし其所に蛇来りて末世の今迄其奇特有

事誠し人々難有御神徳と尊敬する事也

一 仁徳四十三年乙卯九月百舌鳥野御遊ひより鷹を放ちて雉子と取是鷹狩の始也

一 夫鷹の天地の間奇物群禽中其悍鳥なり予此の古人も猛列神俊の文に比し和漢と比し是を賞を我朝よて神功皇后在位四十七年丁卯天百濟國の鷹を貢し備へ其後仁徳天皇の御宇唐土の鷹を獻し此の天皇御獵に出給ひ是を放ちて雉子と取鷹狩の始也夫より代々の帝も鷹を愛して世々其名鷹と多かりし鷹の物大に勇進武備の鳥ふれに武士の左愛を益きそ也遊戯の業に似たりといへとも孔子の獵技もといへとも四時の狩は耕作の害を除く大のふれに往古より其事なきは

か手て山野の狩に馴る、時はいふ形も嚴寒も脛の雪鬢の氷の厭も指を落し膚をさし寒さの堪霍翼八陳の馳引はふらひ士卒の足をかたむるにさふれに武家の用事徒らと謂ふをかたむ

夫て必ま夫釣するをほよむと見

それ賤いぬの里やわらき

山上憶良

松浦の内と領たる人

かく詠せしより此所を賤き里といへとも又濱崎と云は濱績して都の方北入口に此の濱崎と云ふもこせり虹の濱は紫紫の方より見えて大に其形も虹に似たるを以て云へり又神功皇后松浦に汐り、是し玉の其頃濱崎横田の間皆満島山下より入江也元洲上はぬけと満島山虹の濱崎迄の島よりとつて此所は御取と潜入り

汐子流て于瀉とありぬ夫も一暫く汐待しむひて一所
出しむる状時御船于居りたりと云夫より横田と云き
俗と云ふり是、その字と末世誤るその字にありひきを
ると云也又瀨崎玉島の間に大江と云取あり此所昔より
久敷織多村也往古鏡の宮並無怨寺宮兩境内の中不淨
成者あ水は是を取捨夜廻りて非人氣食等事を取あ
つらふと役として住居せり其頃、此所織多の牛馬の皮
をとく事停止也是、故に織多織る、と書文字にて汚穢
村と云也今、其當りの百姓の家居在故大江村と書也瀨
崎向瀨上の北道に海邊に一つ、し石と云石有り此石昭土
松浦の郡境也此つ、之石神代、の石也人皇十三代成勢
天皇の御宇に昭土郡松浦郡の境に包石在り萬代の記に
書載ありと云也

○河上宮

松浦郡 大川堅村

祭神三座

諏訪大明神 武脚名方命
河上大明神 湊姫宮神功皇后妹也
天満 大神 菅原公

棟札文曰

奉再與河上大明神御寶殿一字金輪聖王玉体安穩天長

地久國土豊饒

願主 源治

大工 藤原家久

文明七年乙未八月廿二日

一之棟札日

奉修造河上大明神御寶殿一字意趣者奉為金輪皇王天

長地久御願圓滿武運長久在內靜謐人民快樂五穀成就
社頭不朽一々成就之処

吉志見城土

波多參河守豐臣親

印

天正十七年己丑十一月十六日吉辰

大工 織尾若狹守藤原通有

本社 向午未

祈禱殿

拜殿

御饗殿

末社 三宇

祇園宮

金比羅宮

稻生宮

本社祭日 每年四月初五日 九月初七日

神輿行事

吉田殿配下膚時社司

浦江若狹守藤原吉陳

○天山宮

松浦郡 廣瀬村

祭神 三座

天御中主尊 推產 靈尊

天山嶽之禁小城郡。二社松浦郡。一社在當社。在嶽之良。

倉稻魂尊

祭日 十月二日

記事曰

抑人王四十一代持統天皇御宇來船于鎮西對馬將擴異國
風俗焉因茲參議藤原安弘蒙 勅命退沼之于時天皇賞其
功賜晴氣里焉民人慕安弘之德來集住于天山之下於是祠
天御中主尊於天山之巔為庶民擁護祈五穀豐饒有歲然後
文武天皇大寶元辛丑歲十一月十五日廣瀬本山岩藏上由
是安弘又勸請天御中主尊於此三所以曰天山宮在其巔焉
上宮在其下号下宮云云

本社棟札曰

永祿三年庚申十一月二十三日

當地頭波多 大方 同藤童丸

鶴田 兵庫 八源前

祭器

唐銅 十二大 同 百二十小

右大之方十銘曰

右大之方二銘曰

右小百二十無銘

上松浦廣瀨天山宮 室徳元年十月日 道源 置之

鶴田上總八源賢 天正十六年戊子六月吉日

鳥居銘曰

天正十六年戊子十一月吉日 鶴田上總八源賢 社地 東西五十二間 南北二十間

本社 向申 拜殿 向申 繪馬殿 向寅卯

末社 八幡宮 日里尾大明神

社司家 社內在 午方

吉田殿配下 當社司 三元十八神道宮原土佐正藤原親信

小城木山社司之説

松浦郡廣瀨村天山宮、小城郡木山天山宮其元同一

天御中主命

宇賀瓊命

稚産靈命

此三神奉称天山宮也持統天皇大寶二年 小城郡木山松浦郡廣瀨右二所奉祭祠也 俗并賦天称非也天山嶽并文天祠并故 談之者也

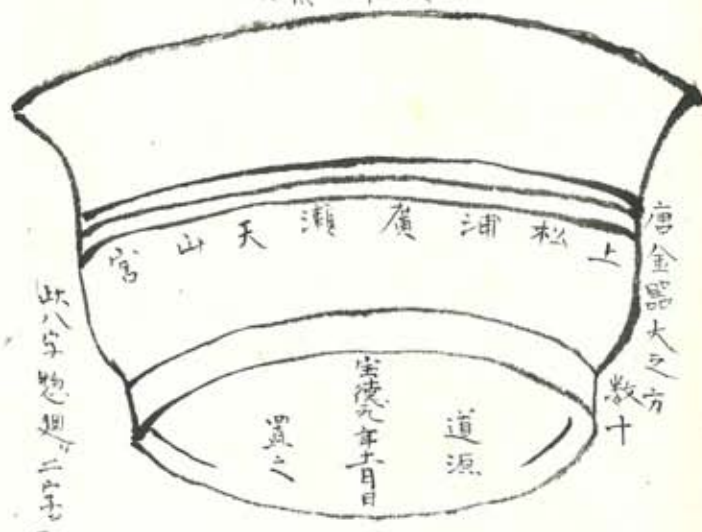
黑尾大明神 右末社也是參謀正三位民部内大臣藤原安弘天山宮社司祖

也即房前公諱也是藤原姓ノ祖ト云神也天平神護元乙巳年

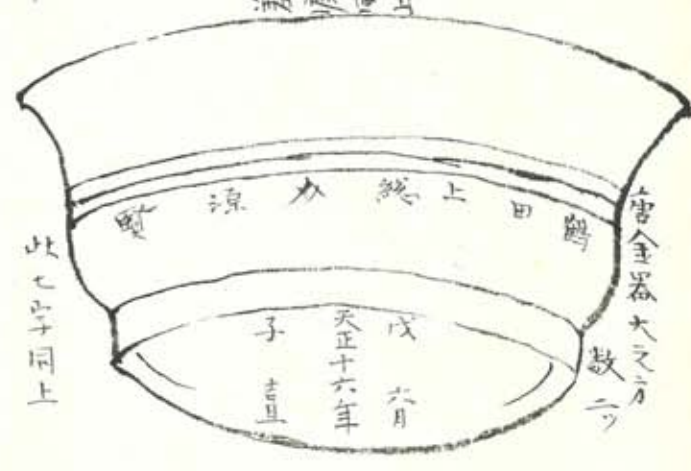
蒙勅宜安弘公為黑尾大明神祝之

廣瀨天山宮神器如次

藏五十二分



藏五十二分



外
唐金器小之方
数百二十有之

○聖母大明神

祭神一座 神功皇后

社地 日玉島

南山村

此社地ヲ珠島ト云ハ皇后三韓之役向玉時于珠満珠ニ
寶ヲ海人得玉暫此地秘藏ニ置玉故珠島ト云

ニ卷ヨリ入ル

往昔神功皇后長門國豊浦。京仲哀天皇の御后ナリ此野
カ川と玉島川又梅津羅川と云云爰におゐて三韓征伐の
兆ヲ試ミ玉ハ金ハ素針と入ルハ鮎と釣多ふニ忽チ懸水
リ此素針トテ釣多ふ事ハ神秘也ト云ハ釣竿ハ摂州播州
の塚不子韓竹ト云竹也今ノ生田須磨邊ノ釣竿竹トテ在
リ此金の素釣トカ、リし因縁トテ此玉島川の鮎トカキ
リ唇金色ナリト謂傳ハ其節皇后の上リカハ石紫臺石
ト云石有リ今ハ川底ト埋ミテ見ハモ川岸カ上ノ玉島山

と云所在り則皇后の宮を案置し奉り聖母大明神と奉称也又于珠滿珠の山として二有り此山の隣り所は加茂某と云隱者有り常に語て云我住所の前は細土橋有り瀧川也前ハ往還ふり適大地震と外々騒ぐ事ある時此玉島山ハ地震を知りて故に此家より生れ去る者地震と知りて其天理如何と笑談せり是れ御神徳成るべし

此地の玉島山に玉島川あり

戀君をより川の浦の乙女子と

と云よの國の海はおとめを

是れ山上憶良の松浦の玉島川に道逢たる時詠せり釣たる女有りて打連たちて行く更先形をゆく是れ何れの里の

何れの家より在るかと問又疑ふべくは神仙々と問へば女とて打笑ひて答ふ皆釣たる者なり但里はかく家もかくして此山水に遊ぶなりと答ふ其事を後に詠るなりと云よの國はより北に世界あり且浦島が子此事はと云よといへると此山上憶良の事八雲御抄より出たり

断簡言

天地のたまは久志ひは常を此くし玉をくし常りし是れ神功皇后新羅國を討むに一時二石を御裳の腰にさし玉玉と言也但姫神長ちたよの彼國を討し七伴の石は此土郡深江村子負臨海岳の上より在る二石大長一尺二寸六歩圍一尺八寸六歩重十八斤五兩なり小長一尺一

寸圍一尺八寸重廿十六斤十兩也如鷄子其美好成事論
絶へた所謂住尺壁是也此二石肥前國彼杵郡平鋪の石
占て是を取深江を去る事廿里往来の人下馬跪拜古老傳
曰息長足女命新羅國征伐の時此兩石を用拵着御袖中以
鎮懐されは是本説より出方葉五誕生の夏ハ世人の説也
末世より下馬の知り此くし玉の事知る人稀也
神功皇后仲哀二年正月立后氣長宿禰の御娘也氣長足姫
と申奉る三十六歳開化天皇の御曾孫也神功皇后と申奉
る武内宿禰と大臣と一太伴武持と大連とを今の左右の
大臣也同九年庚辰二月二日天皇檀カニイ日宮にて崩しは御
年百歳附録之談ニ
五十三歳ト云皇后諸臣と議談をよめて天皇御死
躰を以てやりに長洲豊浦の宮に送りかりしかり奉る説一

播州島崎淡同三月皇后新羅高麗百濟ハ三韓を討其冬
有ト云異説歟
至り三韓悉く平け給ふ三韓の王皇后ハ御陣に降参し
これハ大天田宿禰と新羅に留て鎮守將軍と云ふ三韓
下知せしめありて皇后ハ歸朝しはひぬ三韓今の朝鮮也
十二月十四日築紫楠屋の宮にて養田別の尊と産ふ則
應仁天皇也楠屋の宮ハ今の産宮なり養田と言事ハ生れ
はひし時御腕の上より肉高く集り鞠の玉に鞠ハ箠也其箠
を養田と云ふよて御名を養田天皇と申奉るとも又昭
和よりよし時ハ仲哀天皇崩しはひされは未夕生れぬ已
むといへとも帝王の正統を承は依て胎中天皇とい申奉
る神功皇后辛巳年冬群臣三種ハ神寶を奉り御即位を進
め奉るといへとも甚辞退きしハ皇子に替て攝政を望む

ふ是に依て皇后と稱し奉り攝政を預り多ふ也御年四十
四歳在位六十九年即位御辞退去りて廿九共第十五代の
帝と稱し奉り女帝の始也然共一本に三十四代推古天皇
の始といふに御位を辞しぬに故成るに先帝仲哀天皇と河内
の國長野へ陵を直し奉ると也神功癸未三年養田別尊太
子に立むに御四十歳都を岩余イハノに移して若櫻の宮と云同
四甲申歳に酉歳兩年新羅百濟の八十艘之貢を捧く同十
二壬辰の癸巳迄二年仲哀天皇を越前國角鹿ツノカに氣比大明
神と崇め奉り皇太子同年拜せ去りて同六十九年神功皇
后崩御壽を百十二歳掖城ヤシロ省シマ列レの陵に葬祭を同十六代應
神天皇庚寅元年正月朔日御即位七十一歳に去りて多ふ
仲哀帝第四皇子也在位四十一年此帝欽明天皇三十代の帝の

御時庚寅三十一年に於て豊前國宇佐郡蓮臺寺の麓に垂
跡にぬに其所に白籜八流下り立たりよる八幡大神と崇
奉り又五十六代清和帝貞觀元年己卯に釋行教和尚に神
託しに山城國男山岩清水鳩峯に鎮座しよるに
一人皇三十代欽明天皇の御宇二十四年癸未神功皇后御妹
湊姫神肥前國に鎮座しよるに河上大明神と崇奉り同三十
年己丑冬肥前國菱形の地邊に住す不見三女に成すを
しに神託してみたまひて我は是人皇十六代養田八幡太
りや勅しぬに其時又筑前國那阿郡に白籜四流赤籜四流
下りて其由都に奏しけり八幡大神と勅使を以て送り
ぬにぬ是に八幡の号を得ぬへり其所に松を植て印とし
ぬ是より箱崎の宮位をよるにぬ

一此玉島川にて皇后鮎を釣らせし此希見物と悦ぶ
よ此所を梅津羅國と言也と日本記に見へたり今
松浦を知りぬいぬ梅津の國といふ也其川上正母大明
神と申宮在り是則神功皇后と祭りしなり正八幡大神の
御母君と云ふし悔も故に人皇三十代欽明天皇の御宇二
十四年甲申皇后の御妹宮川上淀姫大明神と同時に詔り
下りて祭れるなり此正母と云ふ字と人さへはと所の者共
云へり國の言くさるてハて福休言葉多し二重嶽とにん
重嶽たけと云十方嶽ととく不嶽と云如斯類多し訓聲
に心付へし又此所に住吉大明神荒御崎大明神皇后の御
船を守護しぬひぬ也此因縁を以て平原村に住吉大明
神を勸請し奉る也

○浮嶽権現

肥松浦即自木山
筑上郡吉井村

筑紫富士吉井岳云林麓一里四丁四十間 社守吉井村清栄坊

及内

浮嶽吉井嶽云高六十五又往還一里十丁白山権現宮半途

在り是火火出見尊日向國ノ和田津海ノ都ノ行幸志多
時暗夜に籠燈を捧りて所也唐津ノ丑寅當り依て露
城ノ鬼門の守護神也今ノ若し難敵在り難儀不此一念
に祈れば風難と云ふの神燈を見せぬ靈驗はた也諸
船の輩此近浦に旅泊を候時、詣下り也禁松原東西二
町見上山南北参町奥皆山續き也近辺の山半ぬくとして
絶頂より又一名筑紫富士云也

築八筑、築

吹拂ふ嵐はたむ夕さ水を

よ吉井の雪の浮波

河崎、岫也

又此山の筑前國肥前國兩國の境に有る南の麓を白木と云
松浦郡の内也北の麓を吉井と云怡土郡の内なる山の表
吉井は白木故に吉井嶽といふ也其形富士に似て右高
山也頂上は権現の宮在兩國の山といへ共其表筑前は白
木内へ築紫ぬ共言也彦山は豊前豊後筑前三ヶ國にか
らといへ共山の面向ふに依て豊前彦山と言富士山は
甲斐相摸駿河三國に渡り共駿河は向ふ内へ駿河の好
と云皆是山の面は志長がふ也晴天は此山の朝鮮國の
釜山海の濱かきり見ゆる也西上人歌在りといへと
自作の集に諸國行脚の時筑前鐘御清きまきま在此山九列の名山也
音り聞く築紫のぬきを来て見れ
霞のりまらふ雪のりまらふ
西上人北流

○作禮嶽権現社

石祠銘曰

永正三丙寅年

彦山権現也 松浦郡 平之山
彦山參神、北岳天忍骨尊
中岳伊弉册尊
南岳伊弉諾尊

鶴田上總女源賢建之 祭日二月十五日

英彦山派天台修驗

社号 山類村

蓮乘坊

○葦王権現社

當社基元

土御門帝兼元二戊辰年創建之云

近曾作磴階四百五十級也

鳥居銘曰

天正十八年寅十一月吉日

願主 鶴田上總女源賢

官司英彦山派天台修驗嚴木村

東光山

實性坊

参日十一月十五日

○若宮社 下宮

中島村

祭神一座

大己貴命

祭日十月九日

本社

拜殿

鳥居銘曰

天正十七年己丑卯月吉日 願主 鶴田上總从漁賢

○若宮社 上宮

同

祭神一座 同

祭日十月廿日田久保氏白水氏之祭神トス

石祠銘曰

天正十九年辛卯九月吉日 願主 鶴田久禪坊豪海

○住吉大明神社

松浦

平原村

祭日 正月十五日
十月十九日

當社者神功皇后三韓征伐之時勸請二神於兩鄉而為
行軍之補佐也一濱崎郷諏訪大明神也一當村住吉大
明神是也

○熊野權現

元在滿島山此地有津
本城十九時此地三移之

魚之原大石村

○英彦山權現

同

同村

○天神社

同

同村九隈

○八満社

同

滿島浦

滿八幡

○七郎大権現

祭日九月十九日

下松浦即
平戸城下

○乙宮大明神

祭日九月廿三日

同
城中

○志々岐山神社

同志々岐山氏云又津吉村氏云

○祭神一坐

權武王弟

十城別王下松浦明神号

社寺真言宗

社領百石一三百石トアリ

○安満岳神社

祭神

妙理権現

同中野村

社寺真言宗

社領百石一三百石トアリ

○田島神社

壁島

祭神五坐

大山祇命
權武雄命

陽神二坐

延喜式肥前国四社大

田心姫命

社一小社三而以當社

多喜津姫命

陰神三座

市杵姫命

為大社

御朱印社領高百石於壁島賜之元豊臣大將ヨリ賜フ也御朱印ニ姫島神胎平野皇之
至下有吉田家裁許状ニ平野内藏允ト有之
下社家三人

末社

佐用姫宮

望夫石祭

欽明天皇朝高麗有叛遣大伴挾手彦征之其妻佐用姫
惜餘波追慕之到松浦山振衣巾招船哀歎終死去名其
山曰中振山於此社内号望夫石祭其靈也松浦山一名

仲哀天皇ノ弟權武王ハ
田島ノ社ニ崇其第ヲ
志々岐ニ崇

鏡山從姫振衣中日振中山又曰領巾振山共訓此禮不
留山

田島宮由来

田島大明神と申奉り天照太神宮の御弟素盞鳴尊
の御子三女神神代より鎮りよし依て姫神島
と稱して肥前國四坐の中より大社と申し當一社
に延喜式より肥前國名神と稱せり其後天平三未年
仲哀天皇の御弟稚武王と相殿に參りて同十年寅
大伴の占營を勅使として田島大明神と勅号を贈
り給ふ是よりして姫神島と田島と名付る孝謙天皇
勝寶八年寶殿の一ツの蜘蛛出て國家安全の四字を顯し
承和元年小野篁入唐の時船中安全の丸を奉幣を捧

け船上通夜して居給ふに現の中に明神出現し
海上安全として渡唐とソへとも唐土におおて一
の大難あり再び賢戈を憎て害せんと其難遁れり
たし今一年を至て渡唐ありへし
勅宣ありけしを篁も此事覺束り思ひ給ひけり
虚病して此松浦より歸京あり故帝逆鱗は
隱岐國に流され其難のうれかたしといへとも其害
を避けて給ふ事此大明神の御加護なり其後貞元二年
源頼光肥前守に任り肥前に下給ふ此時父満仲の命
に依て九州大小の神祇を寄附奉納せし時帝
圓融院藤原の三儀佐理卿へ勅取りて田島大明神と
額を書し頼光に下給ふ四年目にして天元三辰

三儀ハ參議カ原奉ル儀

年社頭ニ掛リ又鳥居ヲ造立ありテ文化八年迄八
百三十二年ノ不_レ太閤秀吉公朝鮮征伐ノ時朝鮮へ
七度往来シタル小鷹丸トイハル船ト神祓あり御船
板ノ守是なり

社司平野以藏礼家以記
以下同

末社
佐用姫社由来

ハケハクシカ_レアキ佐用姫神社ト申奉_ルハ大伴ノ
挾手彦ノ嬪_リシテ人皇廿九代宣化天皇二年冬十
月壬辰於天皇以新羅窺_ル於任那詔大伴金村大連遺其
子磐典挾手彦以助任那是時磐留筑紫執其國政以
備三韓挾手彦往鎮任那云云時_ニ佐用姫御あり

かすうた不富す

た以此姫島_テふよ_テ来_リ給_ヒ御船_ヲキ_レト_ハね_キた
よ_レト_リ御船ハお_ハ風_ノ帆_ヲあ_サテ真空飛鳥_ノこ
とい_ハヨ_リ給_ヘハ佐用姫_カヲ_ハた_ハ小_ワヲ_ハ走_セト_ハレ_シ
か_スト_ハ御船_ニ御_自ニあ_テあり_トハ_レハ_レ御_姿
此_ノよ_リ石_トなり_給ヒ_シ佐用姫_神石_ニ水_ナリ_所カ
た_ノニ豊太閤三韓責討_給ヒ_シ時名護屋_御在陣_ハマ
さ_シ敵國降伏_ハた_ハえ_おリ_テ詩_給ヒ_シ百石_ノ御朱印_ヲ
附_給ふ_御當家_{東照神}ノ命_ハ稜威_ヲよ_リ二百_トせ_あ
より_ノい_よよ_ニ至_ルよ_テ常盤_{堅盤}御朱印_ヲ下_給ふ

○豊太閤樂書 田島宮内殿_ノ戸_ニ表_在リ_如左

ふ_とと_ふ人_ノふ_まま_、吳_ぬそ_まい_りせ_、此_トハ_レ月

うきあや城をくま淡川のふらきおはひを御召よ
い水まひせたまきまかを字にすいさくまて山
さき世とくく

たきり助九郎せ一連

千國山六良様天下一と見ふく無御坐まあはれ
一夜凡一晴ちつり至まて生者必めつ
少ハ松河しめ一出一御あはれ

文録三年

四月廿九日開

勘定

山之田たき川

前田又花様天下一々花衣及女御年十七也

右ハ加部島田島大明神社殿の庭の表に有り太閤

の樂書と申傳へたり社司平野内藏元寫之

ニ卷ヨリ入ル
○田島神社

別記

按ニ祭神三坐始陰神
三坐此本文ノ如クナリ後陽
神ニ坐ヲ勧請シテ方今五
坐トミ中尊田心姫命左ハ大山
祇命右ハ多喜津姫命市
杵島姫命也

肥前國松浦郡田島大明神ハ祭神三坐才一田心姫尊才二
湍津姫尊才三市杵島姫尊當社則田心姫尊神社トシテ中
尊トミ左湍津姫尊右市杵島姫尊
○宗像ノ神社中尊湍津姫尊左田心姫尊右市杵島姫尊
湍津島ノ神社中尊市杵島姫左田心姫右湍津姫此三社也
松浦郡ノ神社皆末社トシテ太古肥前國第一ノ大社ナリ
トカヤ延喜式神名帳トクニ日本記才一ノ卷ニ素盞
鳴尊伊弉諾伊弉册尊ノ御心ニ適ハ給ヒ根ノ國ニ趣キ
多海ハ一時高間ノ原ニ下テテ姉ノ尊天照大神トミ
ハ多下テ後ハたぬ保トミナリ奉人と望みた海ハ一ト伊

使を立ちて歸朝の折に空一面にかき曇り真の闇と成
けり船路遠くして光を顯しけり船の地を
て船より則附船を寄せ見せりは女神と覺しく
天の岩船に坐りて天冠を戴き其光白昼の如し是
田島大明神也船をひ水ぬして三拜しけり則詭宜有
けり皇帝の宣旨よつて遣唐使歸朝也其船闇夜の方角
を失へり是を知りてため光をもち田島大明
神也とのたはひけり其よし吉備公に訴ふ吉備公九拜
して神靈を尊崇し歸朝の勅を又駿河國淺間
則大伴古磨を勅使として天平十戌寅年田島大明神と
くりぬふ夫より此島を姫神島と号して名越の郡に
たれ事なり又孝讓天皇天平勝寶八年禁中の寢殿の奈け

し天下太平の四字ありけり顯る同年田島大明神の
寶殿の一の蜘蛛出て國土安全の四字を顯し又駿河國淺間
大明神の境内の桑に三寸の蠶出て春日皇帝命百言とい
ふ文字を成りて捧よ川て年号を天平寶字と改め其後
仁明帝の勅命に依り承和元年甲寅年小野篁入唐の時船中
安全の爲奉幣を捧船中を改通夜して居り此の現の中
に明神出現し船中安全にして渡唐といへ共唐土
におろし一の大難有り其賢者成る事をにくんて害せん
を以て其難遣れり今一年を経て渡唐在ると詭宜在
けり篁は此事兼て覺束なく思ひ故に虚病して此
松浦より歸京されしに皇帝逆鱗に死罪に此行を以
て博學多文の人なるに依り其事を許させぬ

て隱岐國へ流罪しぬふ其年其難心付水も遁れ難しといへとも其害を避けりし事此田島大明神の加護よりなり夫より星霜を経て天慶四年丑年平純友謀叛せし日よりして六孫経基多田の満中橘遠保等討手の宣旨を蒙り純友純素と亡し九州平定して後三十年にして貞元二丁丑年八月十五日多田満中剃髮して法名満慶と号同年源頼光肥前守に任し九州肥前國に下水り此時満慶の命よりつて九州大小の神祇に寄附奉納在時の帝圖融院藤原佐里に詔して田島大明神と云額を書し頼光に下しぬふ四年目にして天元三年庚辰年社頭に懸又鳥井を造立き今寛政二迄八百年に及んで鳥井の苔むし風霜のま水で天元三年の文字斗りあざやうにして施主のうらさよ

しよや波多氏は是を造立せしと後人誤て改彫せり波多氏の元祖源太史判官久松浦郡を領して久壽元年甲戌彼所の社今宮大明神と崇天元三年より久壽元年迄百八十年の相違ふり波多氏の元祖源太史判官より以前は武列箕田に任其以前は波多氏の名在る事を聞も肥前守源頼光の造立を本説ともへし此人天元に合り又太閤秀吉公名護屋在陣の時此島の形埤を立たる如しとて壁島と名付給ふ太閤秀吉公此所に麻符を催して狩捕たる處を社壇の前に寄り水に群集の臣下神明の咎れいふふ此を是非の外に出へしと申け水とて秀吉公少し恐れぬも何条の事ゆらんやと寛然として居ふ所は忽ち風波起て集たる所は麻不残打ちして穢土を清とせぬ則

大宮司におふせて神を、しゑの神樂を奏し、おふ其後祈
禱祈念おこたり、おまに奉納寄附等有り、也。已に朝鮮國
先陣加藤主計正小西攝津守其外軍勢出船の折々、朝鮮
國調状の祈禱をなし、おふ郡社の後の森に大石在り是を
三韓王とて其前日壇を築き七五三を引て丹誠を抽て
祈り此に而騎の兵弓箭を帶して朝鮮の方をむく、矢
を放て鯨波の聲を揚げ此に、**其大石**堅く中を割れたり
秀吉公斜るも悦びぬ、軍勢船中無難歎陳退治の祈願
に込たは、朝鮮凱陣の折々、召替の船を奉納在り、又朝
鮮の梅苗奈良の八重櫻の苗を此所に植させぬ、今其
跡残れり、肥前國四社の中の大社たり、外に皆小社と、松
浦郡の諸社皆末社也、境外の末社は、佐用姫の神社有り、縁
記別に、出で太閤秀吉公、挾手彦の因縁をたゆ、召し、又、
おふ國了向は、此に吉例を追賀し、ぬ、類ひぬ、旧跡とて
高百石山林相違なき、朱印を寄附し、おふ、依て、今、吾
迄代々の將軍御朱印を下り、此に也、寛文四年甲辰年、寺社
領朱印を改め、おふの時、佐用姫神の旧跡御尋在り、と、
往昔よりの奉納の寶物、海賊此島に押寄て寶藏を破り、盜
取り、波戸の岫にて破船を、此時寶物皆紛失せり、大宮司平
野内藏元、從五位、任官を、御旅所宮崎也、

前よ云ふ鳥井の事、八前太平記に、紙友退治九列平定の
時、多田満仲九列大小の神祇に奉幣奉納等在し、
書けり、さ、此に、満中其時其暇、おし、心中に思ひ、
我二度以下りて、肥前の國主たり、事を望み、水に依

て凱陣。折々々此願望在り其後満中剃髪して満慶と
号し源頼光肥前守に任して九州を下り此に幸し
て願望成就の事と命せられしに依て天元年中所々神
社に奉納寄附在りしと也

跡、水、下津岩根と其より田島の神のこ、流るといふよ

二卷引入ル

末社

佐用姫宮

別記

一宣化天皇四己未年大伴挾手彦勅命を蒙り新羅國にたも
むきぬ挾手彦の妃松浦郡篠原長者の娘佐用姫はく

おもひけはら今新羅國とあまむ國と戦う折々々不水の
に遠なき別水にもなるんやと一人名残をたし女挾手
彦と言け不の新羅國に妻に供しぬへ行末衛費束ふし心
爰に何よりとて只管願ひけ水と遣唐使の勅命を蒙り
事おれに其事思ひしよりとむるされ水を暫しのかた
とて鏡一面小太刀一振軸物一卷を渡してまぐら唐土
浦の船を出さん趣きしに佐用姫心乱れて跡を慕ひ志
をわがたしと持たしり九里川を渡りしに誤て鏡を水
底に落しぬ夫より領中摩山の絶頂に登り聲をききてま
祢尊ともちや追風を誘水沖に出ぬ此時木の根芽の根
取付て漸く登りしに依て鏡山の芽其道一筋下へをひく
也今の世にて其志に在る事寄持といふももろりな

此もや船影の幽なる成りぬ。夫より船影の近き方といふ
るに、よひを川の島と見当りありし、かへ行くくと挟手差
の名と呼て志大已れ。よより今の呼子と呼名の浦と言
也。て下海士の釣船に打乗りて姫神島に渡りぬ。此島の
小高き所は傳ひ登られしよより傳登嶽と書又田島嶽と
名はく其所をいふあり。唐土の雲路といはれなく一面
に見えたるよ、船影に見へざれば、絶頂に伏轉ひ歎き悲し
し其姿終り石と化す是を松浦の亡婦石といへり。其後曇
惠道深と云所僧挟手差歸朝の時一所に東朝三ヶ水共物
部大連等日本に佛法を廣むるよより神を崇りありと奏
して佛像を難波の堀江に志大寺を焼失ふよより蘇我
編目は指圖に依て此松浦に唐土に歸る時兩僧川上より

觀音を一體彫刻し又傳登嶽に登りて追善を成し辛
都婆を建て歸りぬ。其佛法弘まりて一宇を建立す。天台宗
傳登山惠深寺と号其後此寺号絶したるを再建て今龍
雲寺と号す是佐用姫の菩提寺也と云往古人皇四十五代
聖武天皇神龜四年玉津島大明神神祇官に詔してのたは
ふ日の西に篠原長者の娘佐用といふ貞女在夫なる者や
入唐をかかして死す其姿忽ち靈石となれり。萬代の龜鑑
共成へし今詔を申し下し是を神祇に祭りしむへしと也
武知磨此御告を得て佐用姫の神社と崇む。此時田島大明
神の末社と直し奉りぬ。其以前は傳登山の峯に在せし也
佐用姫神の社僧たりし今龍雲寺寂滅の穢水を忌みり
し依り依て此寺衰微して又立かたく見へずよより波

多相摸守固の代子當りて加部島加唐馬渡の三島と残る
此寺の且家了附り是此時神職より奉幣して社僧を不
此たり其後大閤秀吉公名護屋御在陣の時御尋在て此之
夫石を見給ひかゝる旧跡を其儘より置かたし社を建
へしとのたはひけるより小社を建立を其以前の只其
御姿石に注連を張り其祭祀を事行し武知唐の告文
惠深寺へ持傳へ是此寺の大什寶成しよ以川の垣より紛
失しけるよ又いさき水朽す保りや今ハ是此武知
唐ハ藤原不比等の子也不比等大政大臣正一位子昇進し
薨逝の後文忠公と謚りよ此事大閤秀吉公尋祿に後
以小龍雲寺より此神職より申傳へし斗りよて以律
の垣紛失せしと此知水之体よ申す類ひ不旧跡故

○唐津大明神

唐津城内

宮之記曰

祭日九月廿九日

祭神

磐土命 大直日神

一宮 赤土命 大綾日神

底土命 海原神

八十任日神 底津少童神 中筒男神

二宮 神直日神 底筒男神 表津女童神

大直日神 中津女童神 表筒男神

相殿 水神圖象女神

寺澤屋御城築之時火災守護
上御勸請有之故与相殿

御領主御合カ米丸石

記曰

當社ハ神功皇后三韓征伐之時船路静ナラサルヲ天ニ祈
リ玉ヒテ程ナク洋濤静ニ治リ三韓平定御帰朝ノ後此所ニ
勸請シ玉ツト云

宮司 藿松院

社家

戸川美濃守藤原惟成
安藤陸奥守源政卿
外山一太夫藤原重國

一説

底江宗證、子元底江ト云ニ人石、上磨、孫ナリ
神田五郎宗次、神田五郎廣、自ラ別人ト廣、則鴨打源三郎
カニ田也宗次ヲ慕ヒ神田ト号セリ

夢想到海邊一箇
奉号唐津大明神

世々ハ十々年と

經テ大和國畝傍山を伐開々始テ内裏ニ造リ帝位ニ付セ
多分是と柏原都と申奉ル是神武元年此時武功の臣ニ道
臣の命として内裏を守護し無二の忠臣也此道臣の命の後
胤石、上磨の嫡男底江宗證、靈龜元年卯八月築紫へ配流也
年と經テ宗證免許ト依テ帰洛シぬ旧領ニ移リ水直子
配所松浦郡ぬを領セリ幾程ルル宗證病ニ卧テ終リ
薨セリ其子底江五郎宗次と云人松浦ニ下リテ居城と攝

二宮 神直日神 底筒男神 表津女童神

大直日神 中津女童神 表筒男神

相殿 水神國象女神

寺淨度御城築之時火災守護
上御勸請有之此為相殿

御領主御合カ米丸石

記二日

當社ハ神功皇后三韓征伐之時船路静ナラサルヲ天ニ祈
リ玉ヒテ程ナク洋濤静ニ治リ三韓平定御帰朝ノ後此所ニ
勸請シ玉フト云

宮司 勸松院

社家

戸川美濃守藤原惟成
安藤陸奥守源政卿
外山一太夫藤原重國

一説

天平勝寶七年勸請往古神田五郎宗次依夢想到海邊一箇
之寶篋拾得宗次終尊敬ニ孝誦天皇降詔奉号唐津大明神

私考此説疑アリ孝誦天皇ノ時ト神田五郎ノ時ト不台
神田五郎ハ松浦童渡邊細ニ始ル

二ノ卷ヨリ入ル

一往昔神武天皇築紫と平け日向國と出させ女心十ヶ年と

經て大和國歌傍山と伐開き始て内裏と造り帝位了付せ
多ふ是と柏原都と申奉る是神武元年此時武功の臣道
臣の命とて内裏と守護し無二の忠臣也此道臣の命の後
胤石上磨の嫡男底江宗證靈龜元年卯八月築紫へ配流也
年と經て宗證免許し依て帰洛しぬ旧領をたぬ直子
配所松浦郡の地を領せり幾程に於て宗證病了卧り終り
薨せり其子底江五郎宗次と云人松浦に下りて居城を構

神田五郎ハ松浦童渡邊細ニ始ル
神田五郎ハ松浦童渡邊細ニ始ル

へ復姓して神田五郎宗次と号此人皇都に有りし時三位
藏豊胤と云人の親しく無二の中をりし宗次松浦へ下
り水事と名残惜して難波の津まで送り道中を語り語ら
るる遠境波濤を隔て再會も費束ふし此共太宰府に
おたりぬれ松浦へ下る途にゆるく誓約をなすけ
る宗次夫を纜を解て追風よよせ間もゆるく松浦へ下
りぬ誠の聰明英智の人なれぬ民百姓を撫育し然も豊饒
の地と云ふなりぬ然るに五郎殿天平勝寶五年九月廿六日
乃夜現れ枕元は白衣の老翁忽然と顯を三日を待て北の
海邊に出現すし必ず不思議の事有へしと云ふしと思
ひし夢の忽ち覺しけり宗次奇怪の思ひをなしたるに
凡何ぞ信をすし足るんやと打捨置れしに又翌晩の夢も

前より同じ然れぬ其日は當り海邊に出現すへしと供の用
意をさせ濱邊に出遙し沖を詠めしに奇成哉妙成哉一々の
筐物光明照々として波濤に浮めり間もゆるく渚に寄せぬ
潮をむきんて嗽き直に筐物を携へて帰宅に宗次つら
く思ひけるに我此所を領して遠なきにゆきし然るに今
かゝる夢想の蒙る事神明の加護を疑ひおし穢きし鎮ま
り守護せんと清浄の地を撰み寶篋を納奉るべし其用意を
おしけるに譜代の家臣の始を領内の民まで皆尊敬し
奉り則濱邊松原の地に地主神をおとしし石の宝殿在
りけぬ其所を納奉りぬ此宝殿を申すに忝も神功皇后
三韓征伐のとき西海蒼々として船路静ならず此の皇
后天に向ひせぬに祈念しゆるに我朝神国の印奇成哉幾海

上忽ち浪静し成り此ハ船路も、ヤ三韓を平定し、以
歸朝まじり勢し後此所し勸請を、し給ふと云又皇都
して、三位藏人夢中し信を、所の觀世音宗次し抱水西
海に趣き、ふと見て夢ハ覺め、此を藏人ハ不思議に
おし、此ける其後五郎宗次帝都し出三位藏人の館し行
不思議なる夢物語を、し願くハ君の思慮を、巡り、此今
帝の詔りと申下し給、此上や在在と云、し、と頼
り、此ける三位藏人感涙を流し、世し不思議成る事ハ有
り、哉我等ハ其夜其時、し、夢見し、是則我念し
は、奉る所の觀世音ハ化理顯れ、ふ、也、而子共神
徳を仰き、割符を合せ、たる、く、の靈夢ハ、終り天曉し
達し、此ハ神功し依て時ハ帝孝謙天皇詔命を下し、唐津

大明神と贈り、た、し、此、時、天平勝寶七乙未年九月廿九
日也、往古不變靈驗不減し、神徳ハ、廣大也、旧例ハ、祭
禮ハ、こたり、赤く諸事の式法等又同し、其後遙し星霜、経
て松浦黨、以元祖源太夫判官久々八代し當て鴨池源三郎
男神田五郎廣と云人在り、往古五郎宗次ハ跡を尋て、其名
を請継尊崇して、後鳥羽院ハ御宇文治壬辰年三位藏人五
郎宗次ハ靈神を唐津大明神相殿し、勸請し奉り、此二神則
唐津大明神ハ坐の内、て、た、し、其後天正ハ頃神田
能登守高ハ嫡男神田五郎といへり、宗次聖廟神田村西山
に在右由来ハ聖廟ハ記し、出、に依て略之
一宗次公真筆在文在り、紙ハ性巧て、此、し、成り、し、内ハ文
詞ハ續き、さ、だ、ら、り、其後古記證書教多有り、此、と、

寺澤兵庫頭殿御内。者拜見して其儘に返さる紛失せり
一唐津大明神。御所在肥前国上松浦の西郷に在崎の川向
八丈田の下田地三丈の事四至境書の作也右件田地者親
當知行無相違處也然而仁尊天長地久當村安穩家門長久
子孫繁昌災悉退散仰祈延命為御神燈奉寄進所也仍而如
件

文安六年己巳正月十一日

源親判

右波多親の寄進状の文也文安六年の宝徳元年也後花園
院御宇武將右大臣從一位東山義政公也
一天文十二癸卯年十一月吉日田地寄進状

隈崎右衛門督判

高松寺快幸代也高松寺觀松院寺号也後奈良院御宇

務

武將 大納言義晴の代也

一永祿十一己辰年九月廿六日 日高甲斐守喜判

右棟札有當社 勢畑津右門太夫

正親町院御宇武將義榮征夷大將軍の任官 同二月

同年五月薨依之假御殿建一儘して義照代二造堂在り

一神田能登守寄進状有り其文曰

奉寄進唐津大明神

一刀 二尺三寸 備前

一馬 一疋 鹿毛

一鏡 一面

右息五郎當病平癒之所也

天正十年壬午五月三日

神田能登守高判

卷之八

宮司坊

快辰楷

正親町院御宇武將豊臣秀吉

一 慶長十五年庚戌八月吉日

右棟札有り 寺澤左衛門守豊臣廣忠

後陽成院御宇武將秀忠公御代也

惣奉行並河長兵衛

一 本地觀世音堂の前に懸丸石墨跡著文祿の頃鍋島信濃守

殿在し雲海と云朝鮮人の筆也其文曰

慈悲靄々盈天地

廟像巍々冠古今

一 鐘之銘曰

肥前州松浦郡當大明神者神田五郎宗次以夢想徃來于海

朱点文字
疑誤寫

邊一日箇寶篋而淨海上光明照耀遍滿十方宗次半驚愕之

半崇之奈問孝謹天皇即下詔命跡唐津大明神于時天平勝

寶七年九月廿九日也故所傳一宮光世音化現二宮茲氏尊

降下也尔来歷八百五十星霜靈驗不減昔日異哉今也寺澤

左衛門守廣忠朝臣令工鑄洪鐘祭神如感歎之餘肩明神始終

祝大守遠大云云

大守為尊神德華鯨鑄祝千秋鐘聲亦為名聲大遠近傾聽九

々州

前南禪承允誌雪

當宮司覺仕房

○鏡大明神

一宮

神功皇后

鏡郵

社殿鏡山、麓在、神功皇后鏡ヲ納、祭ハ天或日一宮
神功皇后到當國登松浦山、禱天神地祇、以鏡納于
此、故立祠為鏡宮、天平十年始祭之、祭日九月九日

二宮 太宰少貳廣嗣

後奈良院、御宇、大明神卜勅号アリ

右一二之官司

社僧

米六石宛御領主ヨリ賜ル
同五石宛同斷

宮師坊
御燈坊

社司

同二石五斗宛同斷
同新

多路見記伊寄
坂本出云

記曰

桓武天皇、御宇、鏡大明神社殿以裏ヨリ、御造營アリ、後奈良院、御宇、改勅額下玉、社領松浦郡草野庄、附高二万五千石也、九月九日、祭日、毎年市立リ、諸侯ヨリ一州二疋馬ヲ

献セラル、伝社、境ハ八丁四方也、方一里、間下馬下乘也、境々、印所、八丁塚、云宮殿七堂、大伽藍惣廻廊、釋迦堂、毘沙門堂、不動愛染兩明王、其外末社、数多也、鐘樓門、山門二玉門、一、二、三、華表、御供殿、普請方、諸役三百廿人、大官司、草野陸奥守源鎮光、復姓シテ、後藤原成、草堅宗璽、迄二十八代、元祖也、往古、社僧領一万石、大官司領一万石、下社官十八人、大官司ヨリ扶持、其後、草堅威勢強シ、一園ヲ領トナリ、社僧法印政所、坊官路坊、御燈坊、御供坊、轉法院、始テ、草堅家ヨリ、賄成、草堅氏、鏡宮、並無怨寺宮、大官司也、戰國、役ニ戰敗シ、今、僅社僧二坊、社司二人トナリ又

社記曰

鏡大明神者、人皇十五代、神功皇后、長足姬尊也、往昔三

韓征代出御之砌於鏡山神功皇后捧寶鏡自祈誓天神地
祇而安置寶鏡于當山依之以來號鏡山而後奉齊祭今之
本社也故奉歸鏡大明神奉稱松浦明神是也松浦郡宗廟
之神社而國史等詳明其神德今又不有暇系奉故略記之
耳

二宮記事

松浦鏡廟二宮祭神者式家始祖參議式部卿正三位守合
之長子太宰少貳後五位下藤原廣繼朝臣神靈也朝臣有
故違天聽為官兵終敗績而自辭世矣後蒙天赦使其靈
魂鎮座於茲地于時吉備大臣兼敕而未奉齊祭朝臣于鏡
廟二宮也猶由緒委于續日本紀及諸記事焉故今又不贅
於此矣後奈良院天文二年奉敕奉稱大明神則并祭於鏡

廟宮而尊號松浦二宮大明神是也

二卷ヨリ入ル
○鏡大明神二宮

別錄
緣記

一 天津畷根尊の末孫大職冠鏡足の御孫淡海公の御嫡男太
宰少貳廣嗣公宣旨に依て九州の鎮守也筑前國太宰府に
御座之居より聖武天皇の御宇天平七年倭臣の讒言に依
て奈良興福寺沙門眩昉僧正勅命を蒙り調伏を廣嗣公是
召し皇命を背り奉りし事なし非義の勅定有事む保人か
りて帝を恨み奉り水に謀叛の気さし出たり伯父君房崎
殿諫め止めり水に共早天聰に達しけり忽ち朝敵の
穢名となりぬ一先三韓にいたりて討手と防々んと思
召叔浦郡飯屋の浦に出来はひけり共龍馬一歩に進ませ
此時龍馬の平首と打落して是を脇にさみ珠木にまたたか

りて海上に浮きぬいぬ舎人なる者龍馬の胴と埋し其所
に自害す此所の者共諸手を上て招き留奉水とも風浪荒
くして沖に出ぬい茅原の浦に着ぬいぬ此浦の者共集り
焼火の所てはひらせり後には焼火の筋とて鏡末社の
一つなり然る廣嗣公御不例にして亦やませぬよとて人
抱し奉水とも終り天平九年十月十五日薨御ぬいぬ其
夜所の者共御靈亭有り幸福の此所は金胎兩部の地と
去はるに我廟と云たりんよ末世永々守護神と成る
と各夢覺て不思議と思ひ則其所に葬奉り廟所とせりか
るふ所は都より討手とて数千騎引率し此所を来りぬ
所の者共銘々の罪を謝して始終を語り事分明なき其
陣を引て去るに云しと訴ふ帝は叡慮を安んじぬ其

後一字を建立して茅原寺と号す其時迄は大村と茅原の
浦と云り今大村の田原入江にて大船に繋ぎしと云や神
鏡八寸方圓の鏡にして松浦より光りや放ち皇居を恨み
しぬいぬと云故は貴高の僧は勅命有りて御祈禱有けり
と云其印しなると聞ゆ又不思議なるに元明天皇の
御時和銅二年築紫觀世音寺建て二十一年にして眩昉僧
正不義顯水築紫に配流せり此寺に來りぬ或時玄昉説
法教外の折々高座の上には控て其首抜失たり是讒言と
搦て調伏したる罪萬民の知る所也其時太宰府にては
いゝ成る人の仕業共知らされ共調伏の非義に依て天誅
成へしと專り沙汰し新羅と云や王城にては博士に仰せ
て占しぬいぬふりぬさしく讒者の舌刀は依て征代の官軍

と向日の山に靈魂怨敵と成ると奏しけり則吉備大臣
と勅使として天平十九年九州へ下しむる築紫の博多へ
来りて此所より三拜歩きて麻家まできたり水
尊靈龍馬はたかり歴然と顯走ぬけり水は吉備公勅宜
也とあり然水と少し給はる白柄の長刀を
以りめり立向ひぬる吉備公姓古一字の師たる事と問
答しぬひ一字たりと見師身の禮は黙止かたくと勅
宜と請ふに此事神秘な水は略すと有り其時松浦の宗廟
鏡大明神と勅書と渡しぬる誠と和光同塵の大慈悲奉世
て尊敬し奉りぬ其後桓武天皇の御宇鏡大明神は御社内
裏より御造営也無怨寺の宮は同事なり奈良天皇の御時
に社領松浦郡草壁の領分と星霜移り二万石とあり

ぬ祭禮九月九日小祭毎月也祭禮一度年々大市を成せり
九月九日の祭禮は日本國中一國式正の神馬を出さる境
及び八丁四方其所より塚在り今八丁塚とて残水り八方二
里の下乗下馬也宮殿七堂大伽藍懸御廊釋迦堂是法内堂
不動愛染兩明王其外末社数々也鐘樓門山門二玉門一二
三鳥井御供殿普請方夫々の役人都合七百廿人也大官司
草壁陸奥守源鎮光復姓して藤原姓と成草壁宗揚迄二十
八代の祖元也其下官皆絶たり往昔社僧領一万石大官司
領一万石たり外は下社家にて其内にて是れ其後
草壁威勢強くて領地廣くなり一圓の草野氏領所と
りて社僧法印政所坊宮路坊脚燈坊御供坊博法院等分地
の様は水りとも草野の鏡無怨寺兩社の大官司たり

是に依勢増長せりとるや今、社僧宮司坊脚燈坊社司坂
本越前同信濃合力未とて唐津城主の宮司坊、現未五
石脚燈坊へ四石社司へ二石五斗宛也草堅宗場の居城大
村也太閤秀吉薩摩攻ノ時筑前博多津より軍勢催促有る
此と也大宮司にて宮を守護いたしと断りて御用捨也
又其後朝鮮征伐、鄭彼地先陣の人数を命せられ此と
也右同様し事々申出け此、太閤秀吉甚怒らせ此城郭
を搆へ武器を餉り叛逆の覚悟と見へたり早速改易仰付
られ夫より兩宮共日衰へたり草野一族の塔、大村南山
功岳寺の院内門限より左小道在り
逢ひ見ると思ふ心、松浦を鏡の神や音子知る人
君子と心たれども、松浦を鏡の神とて誓ふ人

誰ともしも三らぬ別のうねり、まゝ松浦の沖と出ぬ舟人
常ふとを——曇水松浦の鏡山我汲む水、影見

鏡山、五文字を折句——

かみいりてから律ゆでたさ、世系水や八年代重て松浦也梟

一人皇三十九代天智天皇廿御宇同四年乙丑鎌足大職冠と
任官を給り休大臣に任し中臣を改て藤原姓を給ふ或説
は廣嗣公の鎌足、四代北孫式部卿宇合、一男といへり往
古聖武天皇の御宇天平十二年廣嗣公叛逆に付大野東人
を討手、下しぬ不筑前國遠河郡板櫃川にて防戦しぬ
此水共官軍勢に強く廣嗣公戦ひ負手負ふにて當國松浦
郡長野村と云所にて討死しぬと續日本記に出たり
一河海秘言古老傳曰式家始祖藤原宇合一男廣嗣公叛於西

府於是勅大野東人為大將軍官兵之引來是之討時廣嗣久
不利自拔刀斬首飛空蹶殺官軍其靈尊赤鏡見者多死今肥
前國松浦郡鏡大明神也右河抄云鏡大明神云廣嗣
公赤之鏡之現一處云云云云鏡宮之崇云有考曰此
所往古之鏡之云其所之祭之川之鏡宮之云共一說
有天文年中後奈良院より大明神の辨を下し給ふ今社頭
の額に在也其旨に

宗源宣旨

鏡尊廟宮

肥前國 松浦郡

宜授大明神辨者

右依

今上皇帝聖勅

神宜

御表之神重如作

天文十二歲六月廿七日

奉神祇官領長上下部朝臣

社内之軸画金地金泥之法華經二部一者明神の御自筆一
三韓玉の筆也大幅絹地の画軸神功皇后の御符同鞍鞞寶
釵品々寶物在縁記安部仲光の筆に云傳ふ此事不審也仲
磨者人皇四十三代元明天皇の御時和銅元戊申年誕生
同四十五代聖武天皇天平七年乙亥春仲磨十六歳にて入
唐廣嗣公の天平十八年乙未の事也然し其年教相違也又其
終して日本に歸朝すと云へり又一且歸朝して天平
室字元年丁酉五月孝謙天皇詔して仲磨に紫微少相と云

官を下さるゝ威勢強者大臣豊成卿の仲磨の兄也安部
藤原の譚の外に在へし紫微外相の官を賜はりしより諸
卿妬心よりさへはくさるるしふ橘諸兄も奈良磨と云
者仲磨の威を恐れ仲丸を殺し道の祖の王と立んと
て此事顯れ奈良磨の殺さる右大臣豊成は築紫へ流罪也
と云此時豊成の筆ふり共云此事をて實記と云
一往昔の神社として草壁三万石北領主たりし衰微して
後二万石と成り宗揚の代に至りて前より秀吉の命に依り
没落も以前に肥後國の大官司阿蘇山宮筑前國の大官司宗
像肥前國の大官司鏡右三宮の大官司大名にて威勢強
りし今も衰微して何れも其跡寂し
右鏡大明神一宮神功皇后御石を祭也大官司草野備後守

大村鬼城の主たり社領二万石

太宰少貳廣嗣公旧臣

常吉

横田村在

成清

鏡道藤氏

魚末

大村在

有清

半田村在

○無怨寺大明神

寺目也官吏所法也
謂官所守又寺上持局

五反田村

祭神一座 太宰少貳廣継

松浦廟宮先祖次第並本縁記

贈大政大臣大中臣鎌子連鎌足依功任大臣鎌足薨之後給
食封二十戸尚如生時即被授藤原姓有一男右大臣藤原不

比等朝臣是也有其四男即五回門也即藤原傳五卷已明白也

一男左大臣武智麻呂 南家 元右大臣

二男贈大政大臣房前 北家 元參議民部卿

三男參議式部卿正三位宇合 武家 本名馬養見國史

四男參議左京太史麻呂 京家

宇合朝臣有八男

一男太宰少貳從五位下廣繼 松浦庶也

二男贈大政大臣正一位良繼

三男贈大政大臣正一位種繼

四男右大臣贈正一位近衛大將皇太子傳田麻呂

五男內舍人繼手 同時難罪也

六男贈大政大臣正一位百川

七男參議大宰帥從三位勳一等藏下麻呂

八男參議從三位瀨成

右廟宮先祖并舍第殿原案內為後代所註申如件男藤原氏者何背此

或曰

本緣起

右近少將從四位下藤原廣繼太宰少貳任中憲外難罪也

觀世音寺讀師能鑿執事筑前小南洲深雄內豎磯上興波等

慕主公而傳

右少貳廣繼朝臣者孝德天皇御宇臣大織冠大政大臣大中

臣鍾子連鍾足御殿戶之孫正三位式部卿藤原朝臣宇合之

第一子也以天平十年四月授從五位下拜式部少輔兼大養

德守同年十二月為大宰少貳兼行將軍職抑伴少貳先祖父

鑣足御殿戶降授君王功遍天下名滿華夏而以彼子孫非可
任外庭之傍臣然而為令防禦降敵伺隙之危以文武並朗兼
將軍職所令拜任然將軍少武既是天下神妙之聖哲點賢奇
異之其一也於彼存生時有五異七缺之謂五異者

一御髻中生一寸餘角該曰人者雖賢專角不生

二侯宇佐玉殿頃年舉仕圖基此亦希有事

三龍馬出來少武任初年冬十二月郭中聞一音七度嘶之即

時食大小榻又其取解尤奇異也是知竟駒仍試振中打四抗

勞細之間漸々登五回抗如是經數日縮足立一抗遠近見聞

其甚矣

四峙面從者不後龍馬得件竟馬午上後都府之務午後勤朝

之爪立異鉢男奔不似例人于時少武問曰汝何外居住乎申

云丹波國水上郡所生矢用弘麻呂也申曰即被召奉永主人

也又申云誰人洛下鎮西朝夕往返給人其人吾共可有云云

參使更不後御馬足及度內日聞之時進立御馬前也世傳云

龍出來者有峙

謂七缺者

一形軀端嚴強軟自在嘆無敢歎之者歎

二文箱通達內外融洞世俗文筆法門奧義悉

三武藝超羣戎道練習識了知莫不研學之

四歌舞和雅聽莫不感又十益桃燈而脫太刀十燈一時滅之

五管絃幽微律呂弗違淨上天人諸天樂

六天文宿曜陰陽通達伎術自在之條亦勝象

七妻室花容人間希有化人十侍已後夫如水此者有事但依

明之

五華洛鎮西朝夕往返古往今來世人未有此事奇異甚多今

身力豈堪半仍異常人也五異之中一寸

角神通隨專堪半斤石以五町地別

謂七缺者

一形軀端嚴強軟自在

二文箱通達內外融洞

三武藝超羣戎道練習

四歌舞和雅聽莫不感

五管絃幽微律呂弗違

六天文宿曜陰陽通達

件妻女蒙官責即亡身命也其缺雖多

凡此等事以為希有是以高聖姬天皇御學士右衛門督真
吉備朝臣并僧正道鏡又共少貳郎近親人々相共語云其真
吉備苟為朝使以去靈龜二年入唐至于天平二年經十四年
之間碎々分明研鑿教多以典外書天文陰陽又能搜試人情
令件廣誅朝臣者猶尚勝於兩朝人也戈紫優長武藝茲朝內
外通達異能蒐備矣此人自然為物妨欺朝家蠹害斯而已如
是質尋毀謗之間以天平十四年冬十一月被加從四位下遷
右近少將其故何者相會彼新羅賊之日為我朝有勸公之節
仍所被拜任也爰高野姬天皇薨却不快之氣令候道鏡其籠
罔極漢宮入內之夜如星侵川仇嫌成宴之朝似鸞戲花帝王
之位因斯難惜後代之謗乎不敢為耻而問天變怪異種々非
一於是少貳以天平十年勤之類以上表其詞云臣聞昔者天

尋同礙

勳古勳字

子有諍臣七人不失天下諸侯有諍臣五人不失其國是故三
王御國恐有過而不聞五帝治世懼忠言之不達或懸法進善
或置木召謗伏惟陛下乃賢乃聖克文克武直華枚勳何得間
然可謂黃河一澄幸逢聖運哉但智者子慮是有一失頃小人
道長君子道消上下道隔民不安堵加以昊天誥譴嗟有丁寧
羣臣上下未聞極言臣子之道豈若斯哉臣家開闢以來及至
今日鼎食累世冠蓋相連恩賞起於名霍采宦類伊周覆載之
恩亦而不朽豈如荆軻感一旦之恩為燕報讎張良思五世之
寵為韓威秦若斯而已雖觸龍鱗不敢味臣聞皇之不極謂之
不遠時則昊天示變丁寧君上若改過修德轉禍為福知何不
改天則罰之然則天平五年又至十一年并六十歲太白徑天
策劉向五記論曰太白少暎弱不得專行故以己未為畀未得

徑天而行。徑天則晝見。其占為兵為大臣為民主強國弱主弱國強。臣勝主。坎之叔占可畏也。重以去。天平十一年十一月廿七日。太白晝見。在心度日。正午時見。未申上。有芒角。寂可畏之。穗在申。曰心。為天王海外主。故置積率而衛已。五星極。此度而有變者。主者惡之。雖魏晉末代。君臣同床時。而未有太白少陰在心。上而晝見也。天平十一年正月廿九日。灾可畏。大史所知。故不勞陳。二月廿九日。夜半地震。蕭牆之外。者又詳也。大史所奏。故不煩。重十二年二月。陰獸登樹。奪陽鳥之巢也。以五行傳案之。恐有賊人奪君位之象。子臣愚一矣。識記曰。胡法諫國已頃。將若佛法漸頹。寂可畏也。何則。結集正教之日。十地菩薩四果。聖人咸集一處。告誓言。從此結集以後。一言一字不得增減。然則增者失。音減者迷。律內傳律教。禁斷著正五位。色而今僧

正玄昉恒著紫袈裟。一項違正法。令諸僧尼漸染邪道。豈如此乎。又諸如來三乘教中。未曾聞流放僧尼。內挾舐糠之心。外曜指鹿之威。佛法之貽。亦何如斯。又出人者。齋出國家。如牢獄棄捨妻兒。如枷鎖不得畜養。如犍牛馬。沽酒屠肉。耕作商賈。而今玄昉畜養。奴婢興作。舍宅聚積。賤賣釀酒。屠肉作農商。侶一同白衣。法滅之漸。彌翁外道之跡。頌起者一。何悲哉。又出家人者。一切衆生大導師。故堅制威儀。以導三有。又僧正者。佛法綱紀。法興廢緣。此一僧然。以曾無頭陀。安居種。威儀而香華飾身。愛著女色。宛如白衣無戒有情。又十地菩薩。非肉眼之所能見。坐禪靜慮。處非娼欲。所緣之境。然詭說現身。值遇十地菩薩。矯言身證。坐禪道昔。聞大天。污穢正教。今見玄昉。欲絕法綱也。遂令全身。

大六佛眼流淚矯下賤女子偽稱弥勒豈非法滅之相哉臣
 愚二矣金光明寂勝王經說日由諸天護持亦得名天子三十
 三天主分力助人王若王作非法親近惡人三十三天衆咸生
 忿怒心天主不護念餘天咸棄捨國所重大臣朽橫而身死惡
 鬼乘入國疾疫適流行若有諂狂人當失於國位由斯損王政
 如象入花園然則頃歲賢臣良將零落殆盡百姓死散里社為
 墟疾疫流行時無虛歲嗟呼興廢之機係此一時可不勉哉臣
 愚三也我聖朝之為國也光宅日本臨長安而並明包括萬邦
 對唐王以爭雄但唐王恒云天無兩日地無二主無大唐則日
 本無日本則大唐豈有東帝西帝者乎遂挾存心窺我上國者
 歲已長也叢番新羅虎狼尔心含會替之耻畜勾踐之怨祈禱
 羣望搆禍國家者日亦久乎北狄蠶夷西戎集俗狼性易亂野

心難馴往古已來中國有聖則後服朝堂有變則先叛其為俗
 也子報父歃孫酬祖怨但以畏陛下之威武服聖朝之文教區
 爪牙於毛中戡羽翼於鱗下縱令朝堂有肝食之急邊城有烽
 火之驚豈有忍父祖宿怨忘子孫之丹心哉頃者賢臣已沒良
 將多亡百姓零落里社為墟四隣具聞八表共識當今練習五
 兵振威四海先諄後實災變或視能崇賢選士撫慰万邦割却
 虎祖簡易糞粉復八柱之已頌張四維之將絕然則遠肅近安
 民豐國富大平之基華戎共欣康我之歌朝野同音豈可偃武
 棄備將士解體修條偃義之仁從臨楚之詐謀乎兵法曰天下
 雖安忘戰必危勿待彼之不來待我有備而待也然則解却兵
 士出賣牧馬抑止射田若斯事條未見其可臣愚曰夫又僧正
 玄昉掌中有通天之理直達中指傳聞大唐相師曰當作天子

也竊負此言。窺實位，受惑陛下，欺詐后宫，總絕蕃屏之族，令朝廷無維城之固，放逐棟梁之家，令左右絕忠良之臣，集出吉政，令天下積怨於陛下，舉動大役，令萬民疲瘵於興作，偃武棄備，滅吳九術，又從五位上守右衛門督兼中宮亮近江守下道朝臣真吉備邊鄙傳子斗箭，小人遊學海外，充習長短，有智有勇，有辨有雅口，論山甫之遺風，竟慕蒞高之權謀，所謂有為英雄之容，利口覆國之人也。亦作玄昉左翼而弊。陛下明德，臣熟視二盜，契為比目，雖陛下撫育之恩，起同位而進退周旋，猶如餓虎先知，二盜必有求乎，若不早除，恐貽噬臍之憂也。太公曰：涓水不塞，將成江河；兩葉弗去，將用斧柯。夫視日月之光，不為明目；聽雷霆之動，非為聰耳。所謂上智者居高堂之上，知

日月之次序，見瓶水之中，知天下之寒暑，臣請賜尚方劍，芟夷二盜，省薄苛政，以扶頹運。天下幸甚，誅桀忠而謝吳王，楚子故事，戮是錯而賜七國，漢帝上策，臣愚五矣。臣聞鳴鶴山鳥，猶惜毀巢，况乎我國家宗廟社稷，與日月競其照臨，與天壤齊其終始，然為玄昉竊賊，吉備凶豎，所謀者豈不哀哉！忠臣義士，以何面目，載天蹈地乎？廷尉屈師，傅朱雲高志折檻，非罪漢文聖德，幸照盆下，納臣愚忠，所謂負薪之雲言，蒿蕘之事，聖人猶擇天下幸甚，難知此旨。上表時，帝更不被納，作表奏，可讓帝位，為玄昉之由，以和氣清麻呂，為勅使，奏字佐大神宮，專不憚，帝勤為撰神罰，返奏不容受，給由帝姬大賤，攻彼清麻呂，降穢麻呂，斬其手足，已配流墮岐國，替宿衛，爰商客之舛，遺於逆風，來從管州密通，事由乘船浮海，得達宇佐宮，俯伏拜表，申云：為撰

女已不肯者使命之七七此女
不以其意達也而為其道
中處之義乎

神宣返奏不容之由今遭禍難唯願神驗如故還後悲哀眩人
覺悟之次手足還生神助不空感喜之至即依祈念之應建
神護寺在安岩山今為御殿于時玄助者帝王御恩之餘矯志
自長於少貳在京妻室命婦欲通花鳥之氣以風多情之志女
已不肯破白單衣染翰飛文落居都廳前少貳忽以上洛高聲
放言城中之人善聞為恐是舉世云僧正被放歎廣繼朝臣已
上女入也天下俊者也一箭射四方為君為臣必致凶計不如却朝
庭乃至新身命即天平十九年九月急激發軍兵以從四位上
大野朝臣東人為大將軍從五位上紀朝臣飯麻呂為副將軍
々監軍曹各四人并召集東山東海山陰山陽南海五道之軍
惣一萬七千人委東人等持節討之又召集人廿四人令候御
在所右大臣播宿祢諸兄并勅授位各賜當色服發遣冬十月

少貳率一百騎許在於板倉橋河之側親自率軍人為前鋒即
編木為舩渡河于時佐伯常人安倍中麻呂發弩射之隨則少
貳却到河西陳云勅使誰人御坐吞云衛門督佐伯大夫式
部少輔安部大夫御坐云良久乘馬出向官使被到來再拜
兼之常人等所率軍六十人陣河西大呼云逆臣豈拒捍官軍
哉直滅身罪及妻子親族者也常人等云為賜勅符少貳下
馬又以再拜即遁去肥前國松浦郡值加浦乘龍馬遙欲移隣
朝向馬於海上不敢進其時少貳云以小直買此馬故不進也
即削頭棄畢乃乘舩浮海得東風往四箇日行見嶋舩上人云
是耽羅嵩也于時東風猶扇舩留海中不肯進行漂蕩已經其
夜西風卒起更吹還自提驛鈴一口臨海云我是大忠人也神
冥豈捨我我是賴神力暴浪暫止然而黑風彌扇白浪不平帆

柱之上種々鳥來居所謂烏鵲壇等也。鳥者佳吉語者音種遂吹著小值賀鳥次還來松浦橘浦。夜即忘日十日也其遺體三箇日懸虛流電鑄落之處今鏡宮也。

抑廟靈非愚只依朝祈神冥懸趣也何因名稱鏡宮電光照耀夜如晝如此之間勅使頻滅二三人浴下外境奉見其影奉聞其名醉氣迷神死已甚滋臣下公卿妖死又多諸卿朝議真吉備朝臣外誰人奉祈鎮哉槐林同門學館契深况又祭祀祈鎮其能尤勝者以真吉備朝臣所被擇遣也奉宜者以後令修降伏邪惡之法途中每宿勤在河臨解除之被又從筑前回宗像郡以圖座四枚宛著手足御幣負背匍匐來高聲唱申一日為師終身為父一字千金二世恩重依聞以唱念心急和影談存生沒後之事等不敢致害。所兼思計真志備勅使下也我心奉和也云云而聞

道鏡僧正屈請有驗名僧登大和國高山一向勤修北斗七星之法於殿上宮中所々令修調伏之法又依託宣以右近司立檜木造立同身六尺誦勒佛像一鉢又書金泥法華經一部。宣云以宣宣檜木從引導佛可被造云云仍以作大令送然乃以二十口僧為使奉擔下作佛經其料夫六十人也於斯勅使真吉備朝臣以天平十七年造立廟殿二字奉令鎮坐兩所廟以即建立神宮知識無怨寺奉安置佛經以彼二十口僧定置祈願住持之僧以持夫六十人分置宮寺雜掌人。御墓守三十人寺家雜役人三十人至于彼遠忘日者晝則披存時持佛法華經講說一乘妙義夜傳菩薩三聚淨戒被加行府御誦經復次天平十九年十二月騰勅符為誓度逝齋始置年分戒者又同令始修法華三昧如此等事皆以為祈鎮也時姬天皇寵愛尚甚伴僧正道鏡終被任大政大臣然後未經

幾程。天皇奄然崩。給於大和國添下郡高野山陵。是也。即道鏡奉荷脚骨陵下結廬勤行。而間姦計事相殺。俄被定下野國藥師寺別當。是尚依先帝厚恩也。而任下。不幾。頻以死。去世人云。彼藤原少將靈罰也。亦即舍弟弓削清人男弘方弘田等配流土佐國。而間忽死去。如此。過十余年之間。真吉備朝臣以心祈念。云。刻念着相叶先。可奉事松浦藤原所念已。成就。以天平勝寶六年。拜任大宰都督。即經葵園。定行廟宮。春秋二季。十卷金剛般若讀經。并寂勝會彌勒會等。其料置取。大領田拾伍町。施入。在當郡見留加又神宮無怨寺寄置水田四十町。燈油佛餉。并廟御忌日十五日料二十町住寺祈願僧二十口之料也又免田六十町。三十町分置廟三十一町。寺家雜。又其人三十人料又其次定置鏡尊廟之号。其故何者。廟靈忿怒之時。脚在所方丈。照耀如懸鏡。仍稱鏡山也。又藤少將者是累

葉高門之亂。勤功忠臣之烈。仍授尊号。故稱鏡尊廟也。然則雖大惡忿怒。依彼存時之契。終為真吉備朝臣被祈鎖給。可謂心為具使。命依義輕寧。非斯哉。爰真吉備朝臣任大宰都督。既歷八箇年之間。建立施藥院。并起種種佛事等。凡此朝臣若冠時者。被擇為遣唐使。攀日本之面目。歸朝以降。廣聞賢名。是依佛神有助也。遂登大臣位。多是藤原助成。云云。書云。玉雖有映。不研專無其光。雖能治之人。無傷時者。曾不見其所治。若於世間。無如斯大亂者。誰知真吉備朝臣忠言之潭哉。然則委尋其奧。大略記之。若於後代宮寺之間。有神妙希有事者。詳緇素注加之耳。

天平勝寶三年二月十一日漆筆

鏡廟宮本緣起終

右肥前國松浦郡鏡宮所藏縁起一卷文字不正間有可疑者
應松平和泉守之待臣仙石利重及待醫市井玄迨之需而校
正之別寫一本以為倭訓云

元禄三年庚午三月庚申日

下御靈神主

從五位下春原朝臣信直

二ノ卷ヨリ入ル

一 無怨寺宮ハ天平九年丁丑九月晦日廣嗣公值賀ノ浦ノ二

。茅原ノ浦小着有イケル。此所ハ賤民トシ以テイヨ
。以テ世燒火ノ以テ奉リサレ其御腦痛ニキリサレ其浦
中物音ヲ止メサレハ抱一奉リサレ此燒火ノ以テ奉リ
。し翁ヲ燒火ノ翁ト号シテ末社一ツ也然ニ有為轉變生者必
滅ノ習ハサレハ十月十五日夢逝遊サレ其郎御遺言有テ
此所ニ葬リ奉ル平原寺ト云ハ一字ヲ建立シテ御菩提ト吊

以奉リシ也其後神靈八寸方圓ノ鏡ト現在ノ以内裏ノ
方へ光リヲ放チサレ如何ナリ謂ハサレ帝御腦氣ヲ
。御不例有リサレハ博士ニ占ヒセサレハ靈魂帝ヲ恨ミ
奉リシ也と奏シケレハ吉備大臣ヲ勅使トシテ松浦ニ
下シ由ラ此事鏡ニ宮記出フ爰ニ略ク夫ノ鏡宮大明神ノ
尊号下リテ松浦郡ノ宗廟ト顯ヒサレ其後茅原寺ヲ改号
シテ無怨寺大明神ト奉稱也誠ニ此所ヨリハ聖廟有レ
。此御社鏡宮ト一所勅命有テ御造立也又無怨寺ノ号故
有リ御寺大明神ト崇敬一奉リ也抑此御寺大明神塚亦正
面五丁横十丁也後ハ山ヲ伐開キテ大乗妙典ノ法華經ヲ
敷唐金ノ七十五佛ヲ納奉リシ寺地靈場也爰宮ト立諸堂
鏡宮ト同シ然レハ大加監七堂廻廊等ハ不レハ法華經ト移

しむひしとかや本尊。天平勝宝元己丑年行基菩薩繪之
以て彫刻しむし彌勒大菩薩也。と都藤原の俊成公の
寄附して此御寺宮へ安置し奉りし。又波羅門僧正の寄
附とむいへりか、亦靈地と云ふ。一度此御寺大明神に詣
て信仰。人の無失の難と遁れ天福有子事疑ひぬりし等
也。

按天平十五癸未九月蒙 勅命大野東人為大將。紀飯麻呂
為副將。統軍兵一万七千人也。又軍監右大臣橘宿禰諸兄。戰
將衛門督佐伯大夫。式部少輔安部大夫等。攻討乎大宰少貳
藤原君。君迎官軍於板倉橋河之側。聽 勅命藤原君下馬再拜。
而遁去乎肥前國松浦郡值賀浦。又乘舩到于小値賀島。而欲
渡異朝。然不得順風。亦命也。遂還來於松浦郡橘浦。而自辭世。

夫忠臣上諫書。暗君不被容。則是命也。古昔殷三仁亦然矣。何
憾於天。咎於人乎。配于天心。而致死。則為臣之道也。後世貴賤
崇信者。所以尊。臣道之義也。蓋奉也。無不尊此道矣。國土奉
稱大剛神者何那。其明者何在。拒臣之諫。而罪無罪。恐姦計
之顯。而滅忠臣。攻討之後。恐其靈罰。建立佛場。執行讀經。豐盛
佛餉。供寺家料。是賣僧追從之所為。而逆天之道者也。天下有
道。則所以大為耻者。神靈何饗。此非禮那。後世之正論明。則
天神之不饗明也。後世畏萬民之所奉仰。大明神之神慮。天
地神人一體之道理。人皆稟得。而有不誣私者也。苟為不取迷。
而違天神。而論之再云。

藤義剛謹書

○八幡宮

佐志村

祭神三座

仲哀天皇

神功皇后

祭日十月十八日夜ヨリ同廿日迄

應神天皇

御領主合力米一石五斗

一説

此所神功皇后三韓凱陣之時鋒ヲ納メ玉ツト云

社司

宮寄主税

下司

宮寄但馬

同 越後

末社

鎌倉御靈宮

鎌倉權五郎景政之靈也

松浦黨

佐志將監、建立ト云

佐志將監、墓所此所ニ在

宮之記事云

佐志村八幡宮、人皇七十二代 堀川之院、御宇、康和三壬

巳年、源義家公、家臣鎌倉權五郎景政、九列退治、下向、節石

清水八幡宮、此所、勸請有之、十一月十九日、奉安置、其後

人皇百代、後圓融院、應安五年二月六日、源義滿公、家臣右

衛門佐源頼泰、九列退治、トシテ、松浦郡へ下向、節夢想、

事有テ、願書、神前へ捧、社之修理、加へ、神田、若子、寄

附セリ、其後、松浦黨、信仰、弥厚、トシテ、社之修理、神田等

数多寄附有之、然、應天正、末、豊臣秀吉公、神田不残、被取揚、文

祿三年、波多、参列公、世変、誠、薄運、至、其後、寺沢公、神

徳々尊敬、社之修理、継米一石五斗、御供米、寄附有

鳥居、御建立等、有之、其後、正保四丁、亥、寺沢兵庫頭公、御

逝去御家没収と成翌五年戊子御料と成東都御上使御
下向萬事御調之上當社に修理御供米等御定被下其後慶
安二己丑年大久保加賀守侯御封内ニ相成當社に神跡と
御探り深御信仰有之旨申傳り慶荒増如斯也

○河上山大權現

平原村

宮之記曰

肥前國上松浦郡草壁在平原村河上山權現社者熊野權現
也。往昔人皇四十二代文武天皇御宇大寶年中山伏之元祖
役小角行者入唐不歸行者之二代義崇修驗者慕役師當國
下向之時熊野權現奉勸請於此鄉祭宮定而祈國家之安全
當國者以隣三韓之故也。尔来至于元祿之今千有餘年于此
每歲之祭祀無懈怠貴賤之緇素運步無不奉敬崇祭日十一
月十五日也十一月者子之月也子者北方之位十二支之始
也。是葭陽之元偉哉神德遠照於七末之天近曜於五始之地
奉號日本第一大靈驗者宜哉亦依有由緒當國之古跡鏡大

明神。田島大明神。兩社俱奉崇於同社者也。謹上再拜。敬白
日本記神代卷曰

伊弉册尊。生火神時。被灼而神退去矣。故葬於紀伊國。熊野之
有馬村焉。土俗祭此神之魂者。花時亦以花祭。又用鼓吹幡旗
歌舞而祭矣。

白河院詣熊野時。見路傍花盛。因詠和歌曰
左伎尔保布波那能氣走紀乎義屢加羅左軻彌乃許々憲曾
贈羅左志羅留々。是亦以花祭之意乎

又神代卷曰

伊弉諾尊。與伊弉册尊。盟之乃所唾之神。号曰速玉之男。次掃
之神号泉津事解之男。凡二神矣

今按。速玉之男。事解之男。伊弉册尊。是熊野三所權現也。

古今皇代圖曰

崇神天皇六十五年。始建熊野本宮。景行天皇五十八年。建熊
野新宮。

兩所權現者。藥師觀音也。傳云。伊弉諾伊弉册也。若一王子者
施無畏大士。号曰日本第一大靈驗。熊野三所大權現。

神名帳曰

紀伊國牟婁郡熊野早玉神社

愚案神名帳之趣者。兩所權現者。速玉之男。事解之男也。三
所者。應加於伊弉册尊也。

元祿十一戊寅年九月三日

謹書

○熊野權現

牧瀬村

祭神三座

連玉之男
泉津事解之男

祭日十一月八日

伊弉册尊

此社ハ古昔此地邊ハ山野修験者ハ行場ナリト時安置
セシ社ト云傳ハ於今牧瀬村産神トシテ古來祭リ表シ
此邊山伏岳玉セ山金剛山金剛平金鳥山鳥羽山萬象山圓尾山
作禮岳等皆行場ト云其外五ヶ山七ヶ山掛ケ平原村河
上山熊野權現社至テ其遺跡ト云傳ハ河上山ハ役小角
二代義學修験ハ勸請ト云宮記有リ

○稻生大明神

平之山

祭神一座 倉稻魂命

祭日十一月十九日

此宮之社司秀島氏ヨリ勤ルル古來仕來之故平之山庄屋
秀島氏ヲ祭事與シ秀島氏波多彦浪人寺沢彦封内トナリテ
庄屋職命セリ平ノ浦河内中島廣川志列彦代ノ庄屋皆
秀島氏ノ家譜ニ委

○秘密天神

池原村

祭神安徳天皇殘置シタル觀音ノ像ヲ神社仰秘密天神稱ス
近隣怡土郡一貫山村内塔原云所小松内大臣直盛墓トテ
碑銘委記リ此所人家十二三軒在リ位牌アリテ先年原村

龍國寺云寺安置シタリ是ニ小松内大臣重盛ト記シアリ

○鎮西大明神

唐房村

八郎為朝祭^ラ館跡^ル境^ル今人家廿八軒在祭^ラ為^ス

社目佐走村
宮崎丹波

○大山積大明神社

一称三島大明神

浦河成村

祭神一座

大山祇命

祭日十一月十五日

伊豫守實綱伊予國三島大明神ニ祈雨能國法師として歌を詠せむ大ニ雨ニ

又乙女^ウ苗代^メ海^ニに^シ海^ニに^シ天^ニたり^シ神^ト也^ト也^ト神^ト

大宰大貳佐理卿之額曰日本總鎮守大山積大明神

攝津國三島江の社によるに詞花に

春^ニ花^ハの^ハれ^ハを^ハ花^ハ方^ハ也^ハ海^ノの^ハ玉^ノの^ハ不^レの^ハ見^ルま^ハは^ハの^ハ流^ル出^ルらん

伊豆國三島の大山祇の神社によるに十六夜物語に

あ^ハこれ^ト也^ト云^フふ^ハの^ハ神^トの^ハ言^ハ柱^ニ唯^ニ爰^ニに^シ廻^リ来^リに^シけ^リ

以上三島大明神の神徳を仰ぎ称し奉る所也

天神地祇山川之神ヲ祭^ル天子諸侯^ニアラスニハ其禮當^ルヘカラス

然レ臣士庶トイヒ天帝之崇敬一山川之恩ヲ尊信スルヲ忘
ルベカラス是ヲ舍ラ放心スルハ人間之道非ス天地鬼神ニ對シテ
唯己ガ身利スル而已祈心私ラズヤ人常ニ畏敬シテ天地ノ
道隨フハ天帝山川ヲ拜禮スルノ道理之然ラハ鬼神祚イヲ祈
ト云モノ之鬼神心其祐福何レノ欠下サンヤ深考尊信ス事之

社殿上棟記

維此神殿上棟下宇再建既成矣伏惟鎮座于豫州越智郡三
島攝州島上郡三島豆州賀茂郡三島以上三州而稱三島大
明神者是也伊豆神社者古昔崇峻天皇庚戌年開社祀攝津
神社亦鎮座于州之三島江有由来去伊豫神社者仁明天
皇之朝初祀之嘗太宰大貳佐理卿自鎮西歸京師到于豫州
越智郡書神門之署扁其文曰日本摠鎮守大山積大明神是

乃所以仰神德拜尊稱者也所謂保其社稷和其民人始原是
也謹考勸請其神靈於此地以開社祀之基元雖未分明然有
村落則必本社稷蓋此地之由来也聞松浦黨之家系正曆庚
寅源五渡邊綱屬于將軍源賴光初來居住於西肥松浦所謂
松浦黨之創業是也至于其裔波多親彥文祿甲午之世變星
霜六百有五年以傳其米地矣社邊之地名曰山加美而人家
田園亦若于在於此中則有由来久焉按宗祠之基原當在於
其以前矣是乃有村落則本社稷故也同乙未寺沃志州彥移
封于松浦再後二百三十七年前後星霜都至于八百四十有
二年也崇祀其以前則不可考焉慶治此邑檢耕地定貢稅此
事乃在於元和丙辰田園之簿籍土俗之口碑以山加美為地
号者是亦足知當時社祠之基原矣夫自寶永丁亥之再建以

来。總一百二十有五。而社殿破損。故得卜兆之吉。復以欲經
營之。蓋此地。闕三十年。村民殖益。凡至于八十口。私顧是偏。
所以神明之降福也。豈不仰乎。亦不敬乎。于時天保二年。辛卯
四月二十有一日。神殿成焉。同九月。神樂殿亦成焉。匠工儀功。
忽奏上棟祝詞矣。恭惟農夫誠心。常希下民之蕃息。仰清神慮。
伏願多福。以之記之。社司。宮原土佐正親信。謹讀祝。村中產子。
謹義事。匠工篠原新藏。嗣子新吾。助工井上萬吾。井上甚吾。小
工篠原今右衛門。井上良四郎。石垣加茂茂平。篠原米作。加茂
重助。岸川彌三郎。等助之。以全成矣。村正秀島義剛謹述之。

嗣子曰 義道扶助之

一説曰

巖木村と浦河内之間に圓尾と云山有り此所予卸しと云
野原有り古昔浦河内村より五ヶ山通所深山幽谷に道路不
し熊住居したりと云熊穴或熊山と云所有り熊穴大巖山
有りて岩の内には熊の住居したる穴と云傳ふ有り今往還
道上にさしありたる巖石有り此所岩瓜と云古昔此
所は道なき東の方浦河内より八久保山越へよる五ヶ山へ
通りしと道替して右熊穴の邊を切落し川の上は通路也
来り五ヶ山往還道よ水より右異獸熊退治の松浦源太夫判官
久と聞ゆ是岸岳の城主冠祖に此人渡邊細の孫に岸岳小
由と退治し大川野村眉山の異獸を退治し其砌此地田獵
有り右 獸熊穴の熊を退治せり此たる時予卸しと云事

地名ニ云傳ヘリ其節山神社ニ勸請有リテ獵人山神祭リ
セキ日事後世ニ有リ此山神社ニ産神祭トテ今十一月
十五日祭日ホマ祭礼ニ為キ事仕来也

○楠樹神社

楠村

楠村ハ太古楠樹ノ大木アリテ村名ヲ呼ナセリ口碑ニ
傳フ処閑齋以來ノ大樹朽ラ其株今ニ存ス文政中
日田郡宰塩谷公此楠由来悠久人々知ル処ニアラス然ラバ
是ヲ神木トシテ一歳一祭ニ村繁栄ヲ祈ルベシ故ニ其記
事ヲ書テ祭祀ヲ始ム

楠樹大明神社記

楠樹大明神者在于松浦郡楠村々之西南有牟田里古昔里
邊有一大楠枝梢蔓菁隣里蟠屈西自横枕東至本山齋者其
影翠葉鬱々真幹亭々久歷千歳遠傳不朽是茲村名於是乎
悠矣一為枯木或刻神影又成寶器世傳曰碑徧所人知方今
枯株在于田間因實其事于時文政壬午九月鎮西郡宰豊國

日田 大田郎鹽谷公有郡幸而過此里尚由來于里正渡邊
順々奏以事跡焉 公深感之命里正而使捕株以置神社同
癸未十月三日 公來拜神社自供清酌以祭之而賜福酒於
村民老幼焉再命而使捕苗三根植於社頭而為神木曰神木
蔓菁村民昌榮年々祭祀勿怠矣故每以三月十六日祭之於
是乎用幣於社頭以始祭祀再

ニ卷ヨリ入ル
○道祖神

伊岐佐村

往古筑前國名島の商人某佐嘉領小高に行き此神社より
商の利潤の立願を込め歸りに神前を凌ぎて此川端より
て狂氣となり狂ひ死しりりと云事申傳へたり村ノ人此
神をさりの神と云此所をさりの元と云

ニ卷ヨリ入ル
○鴉殿岩屋

相知村

此岩屋日向回に在る鷓鴣草葺不合尊の岩屋と移し
所也大なる岩山にて奇靈なる所也後世の人の所為欽佛神
の像を数多彫刻して有り傍に難所有り山の岨大なる岩
の上に道有り長十間斗り此有り人廣く繞る三尺斗ふ
一方の谷の深數百丈なる此見り此危くして容易に通
かたし

○神島神社

小值嘉島

肥前國神社畧考曰祭神息長足媛尊神主岩坪氏○三代實錄曰貞觀十八年六月八日癸丑授肥前國正六位上神島神從五位下○古事記曰次生知訶嶋亦名謂天之忍男云書紀天武卷曰四年九月辛卯所血鹿嶋見傳名類聚鈔肥前國松浦郡值嘉知見夕月○續日本紀曰聖武天皇天平十二年十一月以今月二十三日丙子捕獲賊廣嗣於松浦郡值嘉嶋長野村云○三代實錄曰貞觀十八年三月參議太宰權帥在原朝臣行平請分肥前國松浦郡庇羅值嘉而鄣更建二郡號上近下近置值嘉嶋云

庇羅日平戸也

○宗像神社

田平村

在所不詳然其松浦郡平戸領田平村宗像明神祠神主友廣河以持社也其外高來郡嶋原城下松嶋辨賤天社又曰領内串山村云所海邊小島有泊辨賤天社杯此宗形不言故平戸田平村宗形明神也祭神三女神○三代實錄曰貞觀十三年三月三日己卯授肥前國宗形天神從五位下同十五年九月十六日戊亥授肥前國從五位下宗形神從五位上元慶四年三月廿七日庚辰肥前國正六位上宗形神預於官社

二ノ卷ヨリ入ル

○鳴神社

深江村

在所不詳○三代實錄曰貞觀十八年六月八日癸丑授肥前國正六位上鳴神從五位下○家吉按松浦郡平戸領深江村

家吉述神社考攝臣家吉也

嶋護明神社、鳴字、嶋字書誤、江村神主繁木氏

二ノ巻ヨリ入ル

○加茂社

加茂大明神

祭日

滝川山

社目藤川山

岡本左京

二ノ巻ヨリ入ル

○妙見社

妙見宮

祭日

荒川山

社目荒川山

前田一馬

二ノ巻ヨリ入ル

○佛閣縁記問答

我今松浦旧記を集成する中に佛閣縁記等あり奇妙の
怪説多有り或人難して曰寺院其外古書縁記あり：夢想
怪説亦正しかりざる旧説を奉て其伝異事とせざる何
事ぞ如斯異説奉ルハ凡天に本ハいさ人間ハ聰明なるを
後世誣ひ暗を事有ルハ翻て人心ハ疑ひを起し假令正直
誠信の道を解ても人心疑惑となりて公道お力て害を
為る事有んと云子答て曰此縁記ハ夢想怪説亦を以て考
ふへし天正以前徳仁當りハ乱世困窮せ於民心を濟渡す
日と慶長後忝ル東照神君以来太平の化育に浴し日民
心と教化するとい其時慮をさの道有る事を明らるに
ハ乱世の苦しきを受くる人々ハ方便の説を以て是を

威縮せしめて善道に導く事其理面より有る事を知るへし
乱世の心の人の國家を奪ひ人の宝貨を掠むる事貴賤
共其貪欲迷ひ仁義の正道行ハ水は萬民途炭の茹し如
何事も事能ハ凡假令正道を以て教化あるとも貴賤共
情欲を以て其聰明を塗り塞ひて是を解く事固く聖賢と
いへるとも必とも事能ハ凡故是を威縮せしめて善を勸
め惡を懲むる近道に如く事なし其目前有必朝紅顔有又
夕白骨の身となす人身無常の風吹さる事なきを以て
天道地獄の説此時勸懲の法行ハる事彼方便家の教化
より早きハる是に由て正直の道を以て所私心なく導
く益さるの神の教へし神秘なると暫く是を措く解り凡
是又方便に出る如し既乱世暴厲の貴賤の方便の教化

に逆ふて僧法向てハ全く仇ある事薄く此時たとい天理
の正道を以て教化を施すといへると謂ハるハ迂遠にして
事の情に關水るの時にして却て害を受へし故に乱世に
當てハ天賦の道ハ方便の説に如く經傳と浮圖家の手に
傳り漸く全して是を後世に教へ授けり是天下の幸ハ
僧家の賜も也既天正の頃惺窩羅山の先生ハ乱暴城遊
て西域の風俗に隱水剃髮の姿を顯ハせしハる事なり
人熟く乱世の拙き勤ふへ織田將軍造り時代ハ西の
勇將其外ハ窮理に疎く外國の偽教に惑ハるハ貪欲の旧
染を脱する事能ハ凡一旦ハ切支丹の邪道杯に迷ハる
を見て治亂の貴賤を窺ふハる治世ハ乱世ハ癖乱世ハ乱
世の癖也漸々と染み成ル故に政道ハ大事富教の政事

古今の大論其治乱の跡を勘く知るへし乱世に當て、本
智の人、世を道に隨ふに依りて、人、顯はる故に
明君、人を知り、智者、時を知り、天地の間、人常、在りと云へ
と、且、明上、照る、水、顯はる、天地活物、時の変易、を以
て、帝と、凡、世、治乱、興廢、有り、天に晴曇、風雨、有り、四時、温涼、暑
寒、有り、人、得失、隱顯、有り、法、表裏、正偽、有り、右、皆、天地の間、吉
吝、悔凶、の常道、なる故、人、常に勸善懲惡、を以て、是を導き、
農、醫、へ、植、芸、して、穀を育ふ、や、其、邦を、開て、誠を存せ、へ
し、世、仁義の道行、い、時を以て、治世と、此道行、い、此
の時を以て、乱世と、凡、其、治乱、厚薄、始末、有り、其前、兆、天変、妖
孽、祥瑞、の顯、い、を以て、其、活物、の事、を、知る、へし、有
か、た、く、此、方、今、太平、の、邨、德、澤に、浴、し、賤、貴、至、て、此、粗、天道

流行、五品、三徳、を、辨、へ、忠義、孝悌、と、人、の、道、と思、い、さ、る、若、い
稀、也、近、世、天地、人、の、道、奇、妙、不、思、議、の、事、を、明、ら、る、に、
我、人、民、の、皆、其、本、治、乱、の、二、本、也、方、便、の、教化、と、至、誠、天
地、を、貫、く、所、と、時、を、以て、勘、ふ、を、し、天、人、貴、隱、の、道、古、今、聊、も
違、ふ、事、なき、開、闢、以、来、四、時、流行、神、世、の、花、ル、春、咲、紅、葉、の、每
れ、秋、照、り、日、月、の、照、臨、寒、暑、の、往、來、風、雨、霜、雪、の、時、を、違、へ、凡
草木、の、花、咲、實、成、五、穀、の、人、命、を、保、り、走、獸、鳥、鱉、昆、虫、草、木、の
天下、の、用、を、成、し、其、生、を、得、る、物、の、耳、目、鼻、口、手、足、を、附、し、異
へ、と、生、道、行、い、る、所、の、道、を、以て、人、道、と、草根、木、皮、の、能
有、り、と、知、て、人、の、病、を、醫、し、生、と、生、り、る、草、木、虫、の、邪、を
除、け、神、世、と、今、の、異、ふ、る、道、理、を、易、の、理、を、以て、知、る、へ
し、何、お、ろ、偽、ら、ん、何、お、ろ、秘、せ、ん、稀、に、天、変、来、り、饑、饉、疫、癘

兵亂も皆此理をけり此の生道行ハ此を治亂の理ハ譬へハ
義食^ヲ飽^コて喰ふ末に暴馮霍亂を獲き如し萬事動き
代^ニて以て天地の常と凡人と一^ニて此理を早く身^ニ知り
ま^ニんハ有へ^ハう^リ目^ニ四時変易を觀て知り身^ニ呼吸往
來五臟九色五味五音等の行ハる^ヲを以て天地人道一體
の流行を知り飲食衣服居宅貴賤上下物理過不及無^ク
て節文儀則の道隨^ヒ私^ニ命^ニ天道適^ヒ稟命を全^ク非命
命^ニ命^ニふ^ラら^ハむ唯父子君臣夫婦長幼朋友の道を以て天
下の大道とし是に背^クハ踏^ミ迷^スる^ヲを以て近^ク人間の
道^ニ教^ヘる^ヲを此道と踏^レて天の福^ニ有^ル事^ニ是^レ天
地の定理也今問へる所彼怪説を書に奉^ル人^ヲ誣^ヒ暗
ま^レる^ヲの事一應在也然^レに夢想の告^ケ海上不時の耀光我

朝の鐘聲漢土に聞へた^レの説本尊仏の矢受の疵藥師佛
の夢中の藥湯て病愈^スる説或^ハ延喜帝地獄の説唐津淨
称寺の縁記に有^リ是説地獄に往^テ帝^ニ逢^フ右大弁公
忠と有^リ帝^ヲ獄^ニ墮^スと説た^レハ方便とい^ハとも恐^ル水
有^リ又外^ニ草双紙杯^ニ出^キ知^ル日藏上人とも有^リ兩説と
云天子を獄に墮^リ我邦獨立の教へ無^ク誑^キ慢^リの
罪^ヲ免^ル故^ニ是縁記^ハ奉^ル其外^ヲ縁記^ハ依^リ此^ニ記
ま^レとも也右^ヲ私^ニ取捨^セま^スる^ヲ治亂時変を考へ知^ル人
為^レ也又神道家^ハ儒家^ハ釋教^ハ方便^ニ處^ニて勸善懲惡
の道有^リて衆生濟渡の功行^ハ水^ニを以^テ是^ヲ捨^レ故^ニ
古書縁記^ハの説其依^ハ奉^ル私^ニせ^マる^ヲ此集を成^レの例
也と答^フ水^ハ問^ト人^ハ如何^ニ様古事旧説を聞^テ世^ハ治亂時

変々窺ひ、事尤感に堪ふりと爾云

○瑞鳳山近松寺

唐津城下西寺町

御朱印高百石 臨濟宗南禪寺派 御朱地俣岐佐村有

大開秀吉公ヨリ賜

慶長四巳亥年九月十六日閑祖耳峰大和尚

大旦那寺法老摩守廣高公 公之遺物 一夜念佛丸 長刀 一簍 一足袋

一上帶 一烏帽子

一冠 俗ニ云
アサクニムリ 一草履

○清凉院淨恭寺

一勝巖ハ淨恭寺
トアリ

同

新町

御朱印高五十石

淨土宗知恩院派

御朱印地枝去末村有リ 別處
御朱印高五十石有リ

大猷院様ヨリ拜領慶長九甲辰年七月閑祖和尚真誓空阿上天正十五丁亥年閑基

建立施主寺沢志摩守廣高公為御父越中守殿菩提也

二卷ヨリ入ル 當寺本尊御長二尺九寸阿弥陀院如來也人皇六十五代花山

院御宇寛和三年の度惠心僧都其慈母安養尼公小ねく也

ぬひて孝養追善の爲一隻九旬際一刀三禮して彫刻し奉
小の靈像也威容巍々靈瑞多端——洛中の貴賤洛外の緇
素普く尊重し現世の願望結縁々祈修所也星霜漸く重り
て入皇百七代正親町院御宇松浦郡領主波多三河守公役
の岸上京し叡山四明の聖塚に詣て横川の邊に此尊像を
拜して曰我領知も所日本遠地て人心質朴なり凡邪
惡不信の民攝化濟渡の爲猶我子と孫々國家安全の守護
佛と崇奉りくと願はれ——に其事叶ひ則本尊を守護
國に歸り當郡に小神田村山口と云所小山谷の清涼坊在
て一字を造作して稲田教町寄附せり此僧侶日夜の勤修
怠り事なき爰に奇異の説を申傳へ——其頃波多家の代
官職池田帶刀と云者此地を守——に佛餉料田地好田成ル

事と惜——して藤田を替て佛田と——ぬ農民是と受て作と
ぬ——五月頃早苗を取て毎夜童子の足跡を右の替地を踏
荒ら事有り何者の仕業と云事を知らぬ或時射功を得た
り侍五六輩附置夜陰窺ひ——むるに一人の小僧出て彼の
田の中に入右守護の中矢を放り小寺答して覺へり此
共其人を——足跡を志し此寺に附来り小僧同宿杯尋ぬ
水菴も夫がや疑ふを者心形——堂に登て本尊を見水は
佛像の裾に泥土附て在り又左の脇に彼矢筈深射込て
立り水は當番の侍是を見て膽を銘し罪科を懺悔して矢
を抜き取り今に其矢跡歴然たり此故に世俗呼名して
矢負如来又泥土附本尊と云へり又慶安二年五月當寺
四世教養上人住持の時本堂に面り瓦一度小落て近邊驛

動きの事在り亦尊を尋ぬ此の西表の塀の上より遷座し
不見聞の人毎に不思議の思ひを存せり其後の卷上入の
弟子の學歷と云僧在り天性魯鈍に於て睡眠如く誦經
の度毎に沉睡せり或時勤經念誦して眠りて時に鼠色の
衣を着ては老僧来て扇を扇き何おきぬに時節の暑さ
と堪へず様子覺へて眼を開き彼の老僧を見て恐懼し
此の佛壇登りぬかと見へて同体になり夫より單歴眠
りて一聰明になり侍りおき奇特の事共也又現住轉卷元
禄年中北垣春雨車軸の雨降り頻り本堂に拍手して人
を呼音をかり童僕答て出向ふ小人飛して天井より雨漏り
強く篠の雨に急き亦尊を脇の床に移し奉りり佛殿の
上屋根板腐れて落る事岸の崩るるに僧侶奇異の思

いふ右拍手の音を如來の御告勅と有かく覺へぬ
誠の末世に至りて泥木塑像の斯く不思議有る事殊不離
小して真佛不離不即此謂れそと且家他門に男女まで尊
重し奉り事生身の阿彌陀如來の如し然に文禄年中太閤
秀吉高森出陣の事在り寺澤越中守子息志摩守廣忠供奉の
兵士より父越中守當國名古屋に止り守護の士より
越中守此如來の威徳を感し廊堂名古屋に移し給へり
今名
古屋寺 年経て越中守率り此の子息志摩守家督の所親と
辭敬したまひ寺存ぬかとて之骨を當寺へおさめぬ
越中守 藤巖院殿看養淨恭禪定門
御奥 華珎院殿春養慶園大姉
則淨恭居士の法名を以て寺院の号とせり是より依り慶長

元年七月寺領を改増して枝去木して五十五石山林竹
木迄永代寄附の寺とあり侍り也然に慶長四年志摩守
當唐津の城主と成り王ふよりて此地小寺を移し本堂
方丈庫裡亦形なく造營しなふ爰に志摩守嫡男兵庫頭
忠高正保四年早世したまひて統子なきに代々の家断
絶せり四相迂流の習ひ誰り是を免れんや當寺住僧教養
上人寺院の衰廢せ人事攻かむし武州江戸へ至り時の
寺社所安藤右京進殿松平出雲守殿兩所先訴し五拾五石
の寺領分御朱印とせし下されし縁と願ひ申上又當城
の在番として中川内膳正殿水谷伊勢守殿へ此相連御上
使齋藤佐源太津田平左衛門見分の上と以て右し願相叶
ひ始て大猷院殿御朱印を給ひし也代々の將軍御代替の

節頃戴はは事今ふ於て余也凡當寺起立の天正二亥年小
て今迄而三十九年也開山實蓮社真養上人の百三十餘年
の星霜を経るといへり寺門衰變なく師擅盤菜成事當尊
像不思議の高徳成之におや末法萬年の燈ひ明りたるに
て利物偏僧の御利益誰り信せざるや中ふ此寺の波
多廣直公明君理世の跡を尋度民の安全を祈らん為に南
都北嶺の如監を形より聖武祖武帝徳小習ひて此地に造
立し由ふ精舎を水に國家安全四民豊饒にいて現世安穩
後世菩提の道場也

享保二酉祀十月十日當現住轉養比岳山及山

謹而誌之

○一華山少林寺

同 東寺町

御朱印高三十石 臨濟宗南禪寺派 御朱印地平山下村ニ有リ
大猷院様ヨリ拜領 慶長四巳亥年 深山天桂大和尚

○瑠璃光山醫王寺

今改芙蓉山

黒岩村

曹洞家能登國總持寺輪番所也 御領主御合力米六石
寺内ニ北条氏房ノ墓アリ朝鮮役名古屋在陣ノ片此所ニ葬ルカ又
大友ノ塔トラ大ナル墓アリ此寺ニ名古屋在陣時諸侯方書写大猷若經有
其姓名記アリ此寺ノ山号始ノ浦田山ト号ル由如何ニ據カ知ラズ浦田ハ人ノ姓
取リシ者歟閑基ノ縁アルモ歟今用ル処ハ芙蓉山ニ末寺ニ廣瀬村福
聚寺畑津村宝泉寺其外数多アリ

○法雲山龍源寺

唐津城下 東寺町

曹洞家本寺豊後國泉福寺 御領主御合力米九石
應永三十癸卯年二月十四日 閑祖 融融大和尚
大岡秀吉卿ヨリ御朱印三十石頂戴有之ニ此寺沢志摩守殿御代故有
黒印ニ相成 寺沢家没落以後御城主ヨリ合力米三十俵宛年々頂戴之也

○天鼓山來雲寺

宇木村

曹洞家本寺 御領主御合力米六石
寺沢式部大夫 墓境内ニ在リ
此寺ニ寺沢侯ヨリ寺領被宛行書狀如左
宇木村ニ内高五十石全可有寺領也仍如作

寬永十二年乙亥正月二日 兵庫頭忠高書判

來雲寺

同家老中副狀「リ如左

當寺領事先年題目之時志摩守書出兵庫頭被留置則

兵庫頭書出「取替進申「處相違無御坐「者也

正保五年戊子正月十五日

熊澤三郎右衛門

並河太左衛門

沃木七良兵衛

今井縫殿之丞

來雲寺

右、通寺領被宛行「處寺沃彦沒收以後右合力未「成「

○寶聚山功岳寺

松浦郡 南山村

禪宗曹洞派開基草野長門守永久以其謚曰功岳寺境内有墓所
銘曰 勝運院殿前長州大守功岳淨勲大居士

日本寬延四歲次辛未秋八月十一日正當當寺開基勝雲院
殿前長州大守功岳淨勲大居士二百年之遠忌也世號草野
長門守藤原姓永久肥前州上松浦郡草野庄領主也當寺十
五世住持傳法沙門高州叟預三年亦相謀草野鄉大小之村
吏轉玉島山塔廟移當寺東南隅矣曰所以慮拂拭疎漏也然
草野鄉民多先君家臣類葉也故募教民家喜捨淨賤而以充
移墓修之資其及忌筵設齋之助料也斯時前後一七日請諸
山清衆而開甘露門轉無上法輪以追福先君其社忌筵聚會
緇素凡三百有餘人遠近聽衆不知其負也如左祭奠可謂勉

矣余竊惟草野家系年代深遠時是戰國惜乎始末不詳故余撮諸國軍記或覓村老口碑平生無處片言隻字所見聞逐一雜錄焉備後見可共不可錯兼不錯并考則是幸也我聞之昔年天智天皇御宇白雉年中筑後國御井郡領主草野太郎常門者智仁兼備勇士也平日信仰圖通大士以靈木刻彫尊容且新建觀興寺而奏聞天智帝為勅使右大辨種政卿參向云云詳觀興寺記錄也然常門末孫草野太郎永平時當源平壽永亂九國諸士多屬平家草野太郎屬源家以盡無二忠依茲賴朝公厚賜恩祿云云而附囑筑後居城嫡子何某而賜別地肥前上松浦郡居止於此矣于時永平故鄉難忘筑後草野在名悉移此地異地同名此彼相符合者乎再來累代相續來而草野入道圖種元弘建武亂之時圖種屬官方芳野執行

法印宗信曰而今負諸國不變官方於筑紫柔池松浦鬼八郎草野山鹿土肥赤星云云元弘三年八月廿九日入道圖種依軍功賜備旨云云草野太郎永平同種守貞永同四郎入道圖種同四郎武永同永治同長門守永久同中務太輔鎮永同鎮信同鎮恒又我聞之青木何某任鏡明神大官司因茲於福井村庄田三十余町宛行者也向後可為一族親也鎮永書典青木何某云云天文十三年為鏡尊宮敕使參向地頭永久主此事云云又松浦軍記云波多鶴田兩家者草野之幕下也然波多鎮者草野永久甥也中務大夫鎮永者原田劉雲軒了采之三男也永久養子之而相續草野家然原田家早逝而無嫡子亦養鎮永二男令續原田家永久居城南山鎮永居城二重嶽相續築松尾城今云引地是也見于筑前風圖記奧州會津保

科家臣原田氏者草野原田兩家末孫也筑前黑田家臣澤木氏者原田之類族也依有由緒以草野鎮永娘嫁沃木姓同家中松原氏室女亦鎮永娘也云云草野家建立精舍四院曰興聖寺濟家也谷口村曰疊石山天沢寺洞家囷口村曰玉島山十福寺洞家玉島寶聚山功岳寺洞家南山村與聖天沢十福三寺者有為轉遷惟有名跡耳寺者則無焉也當寺者元天文二十三年草野鎮永為慈父永久公所造建蘭若也因請一如和尚為開祖住寺未幾歲嬰老病遷化焉相次寺亦為兵火燒失矣于時鎮永再建佛閣殿堂請囷口村昌岩院貴菴和尚菴固辭不赴相共謀而肅請本師勝山和尚稱重興第一世勝山以老主持不能一歲謝而附屬寺貴菴退間華峰貴菴重興弟二世也爾來法脈嫡々相承來而至於今流通無窮盡也元祿

嬰觸也

年中當寺住持矩堂高欽代當邑南北上隈猫石下新橋稻梁枯朽而下實者一分中數百莖計也如此者十有三年居民大慨而祈神社佛閣雖使陰陽巫覡考古而無其效也茲或占斯則高家人古塚埋在荒野無有識者依此崇有此凶斯時高欽於玉島山石刻地藏菩薩尊像而為草野家一妻眷屬設施食法會其年以來稻枯隨而止云云至今每歲七月朔有施食會余平日慮闕基塔廟本所不正而置懷不忘然去庚申年六月十一日余遇有津城行歸路經歷玉島大道至於此余意頗欲見玉島寺跡即往窺視地形荒蕪土中埋有如塔樣者但謂唯心所為乎歸寺謀村老等而七月十七日至彼地穿石除土則大塔儼然而出矣銘文不泯滅果而闕基永久公之真塔也因茲訟於官官命之而曰寺僧勉勿怠拂拭也八月十一日近

鄉庶民聚會彼地而更造建木浮屠以伸供養余謂此事實不可思議者也

祭文

粵當寺住持高列叟恭陳疎茶山蔬獻備當寺開基
勝運院殿功岳淨歎大居士靈前祝以祠曰

呼嗟先君二百年前時當戰國四夷八蠻一時競起修羅鬪
諍其勞幾計哉然當此撥亂中性海湛然不增不減自徧法
界無動靜相是此一著先君若直下承當非十世古今之所
包非涅槃生死之所挹謹演此閑言語以致祭靈光不昧尚
享

于時寬延四年辛未秋八月十一日

前總持當寺十五世傳法沙門高列叟謹記印判

○相知山妙音寺

一手瑞松山

曹洞派本寺武雄圓應寺

相知村

○洞源山惠日寺

鏡村

曹洞派本寺相刈小田原東源寺

御領主御合力末一石三斗

寺裏瀧絕景也

○

法幢寺

臨濟宗

鐘之銘

外同派

相賀村

松山寺

松實寺

千々賀村

香津江川村

鐘銘記スヘシ

○

潮音寺

湊村

山号記スヘシ

小松内大臣重盛之作本尊觀世音之像有

公

由来書

二卷ヨリ入ル

湊浦有山号普薩落山又如意山其号曰潮音寺觀世音の安
 元元乙未年小松内大臣重盛公の願望ふて難波の浦より
 送り奉りぬ一靈像也是即重盛公世の盛衰を觀して同年
 六月三十兩の金を育王島に送りぬ此重盛の本朝の聖
 賢と賞せし人も此觀世音の佛像此浦より上りし因縁を尋
 ばに其頃潮の鳴事数日小して金色の光り香氣有り所
 者共評定區々也爰に万吾万六とて兄弟の湊夫在り出入
 兄弟連ふ釣網を業とし世に渡りし此兄弟生得律儀し
 一浦人を稀成者り也二人圍爐裏の前小在り四方山

物語の序ニ第万六申すは、斯兄身心を同くして漢事を
あし世をいたり常れり家之、事外なる者も、
適先祖をすべしといへといは漢事の價ひの残り、
漸く香花を捧るゝ也願ひ渡世を替へ一生を送らん
と云ひ常れり兄万五云ひ常るゝ生在鱗魚殺生して世々
渡事々恐る事无成べし、常れり父母の業を
受次兄弟其
家産を受継ぎ、身おれり其業を改るゝ不孝と云
んといさ潮の来り常れり網せんとて兄弟打連て出
然に此頃潮の鳴音をさほく金色の光香象の
顯れし
事不思議なり何とせよ網をおろして見ると
則網を
お流し、奥に一ツの羅、此尊像を
賊夫の網に
かりぬひり、兄弟驚き、船を引揚げ奉り禮拜尊

崇して直下賊々草家に移り奉り、近浦の漢夫遠近
の親族奇異の思ひを、兄弟家に群集して彼を靈
像を拜し、衣皆兄弟身に申は、早く小堂を建立し
尊像を安置す、と云ふと、兄弟家貧しく朝暮の糧さ
に継ぎ難れり、其堂叶ふ事なきに、深く是を歎
き、本から是非なく、臭穢の魚鱗を、安置し奉り居
る、近浦の者打寄り小堂を建立し、移り奉り、
其後靈像の内に、炎上の變在へし、用心覺悟す、
と云ふ、此類焼せり尊像、早く出せし、損せり、
奇妙也、又寛元四年午年、蘭漢といふ僧来朝し、
此汝門小隨身、たふ惠教法師と云僧西海小行脚、
時普墮落山潮音寺と云

七字を壁面に書付て去りぬ此蘭溪、後小大覺禪寺と号して鐘舎建長寺の開山也其後此菴寺を改建長寺と成す其事茂望りんと平氏の祈禱送り奉りし尊像存れ其事成就すべく此事止り又重盛公此尊像の内金子百兩宛々御法料として封じ置きしなり星霜遠くは隔り應永四年戊申洛陽小再興に遣せし佛師金子を抜き取とく此者狂乱して洛中洛外を狂ひ廻り金銀を遣ふ事土砂子の如く或は堂の上より御供を擲喰ひ經文の喰ひ其所の者共せし兼て將軍義満公に達しりぬ召捕りぬ直に獄に下し置きぬ此觀世音の湊浦に下り着りぬ右百兩の金子小々重盛公法華經一部を書写して納奉りて大願成就の尊像也

○金山海高德寺

唐津城下

浄土真宗本寺東本願寺

太閤朝鮮征伐時彼地於諸將士蒸事ヲ勤る故帰朝シテ如以号スト當寺開山其人始織田家臣奥村掃部之介永享三年亥年世辭し本願寺六世教如聖人ノ師トス其師より一寸八分黄金佛開山聖人九十歳像ヲ寫し贈りし其家傳エ其孫小源太云者至り先掃部之介例效ヒ本願寺十一世顯如聖人弟子成天正十一年松浦ニ来り一字ヲ建立し朝鮮渡海彼土ニ寄依多シト同十三酉年七月帰朝ス其後太閤名古屋ニ朝鮮ノ事共尋ラテ渡海免シ彼地ニ討死ノ靈ヲ吊ヒシト金山海号ヲ大閤ヨリ賜リ其外拜領如左

五味茶釜

金銀鍍錫銅五品鑄文

金砂茶碗

古高麗燒

梅繪高麗燒茶碗

タワニニウ

ルスニ、壺

大古物、由

金屏風一雙

檀二境刀筵、画狩野元信画
緑、蜀紅、錦花桐、模様

堆朱香盒

地、彫モヨウ彫上唐馬

本尊攝陀如來春日作本願寺佛より移し來ル開山聖
人自筆書聖人七宝珠教教如蓮如、書教如、袈裟寶塔水
昌蓮花座苦行釋迦、画像了海、筆太夫坊覺明經文掛物
其外公家方墨跡等軸物數多アリ

二ノ卷ヨリ入ル

全

別記

織田家の臣奥村掃部永享三辛亥年世と辞して本願寺六
世教如上人と師とい則僧とありて七世存如上人の時迄
隨ひぬ親寫上人九十文ふして遷化しぬ子教如上人其影
像を写して是を掃部僧号を了頂戴せり今小此開山上人
の尊像高德寺に傳ふ或説小奥村掃部の子小源太其子小
藤太と云者掃部の傳へたる一寸八分の金佛と教如上人
の画せりれり開山上人の九十文の影像と持傳へて古
主織田家に奉仕せんと辛苦を凌ぎ居りし其功織
田信長本願寺と合戦出來て其看到の人教小にかりか
暫く見合居りしと天正十年午六月二日信長明地日向
寺光秀々為小自害信忠二條の御所より自害し今織

田家衰微して故主の仇を報はん者なり暫く京の片邊に
隱居しり此小藤太又剃髮して 顯如上人の牙子と成
天正辛未年僧と成此時迄ハ本願寺東西の差別なし小藤
太廻國して松浦に來り此所ニ高德寺の一宇を建立し顯
如上人より興へられり本願寺御座佛の本尊を移し奉
猶朝鮮國ニ渡海復國てり寄依信心の人多し同十二年酉七
月帰朝せり其後秀吉公の嚴命に依り夜話の御如し召れ
朝鮮國の事は委しく御尋有てさへ申上り此ハ御機嫌克
朝鮮渡海を司るにぬ則ち十八分の黄金佛鉢陀を守
護して彼地に再渡しり彼地にて討死靈魂を引導し太
閤御機嫌克名護屋に於て拜領物有前書ニ記ス

○名古屋六坊ト云如左

- 安樂寺
- 本勝寺
- 正圓寺
- 傳明寺
- 行因寺
- 安淨寺

以上何れハ淨土真宗ニ後名古屋より唐津ニ移ル

ニ卷アリ入ル
○安樂寺

京師本願寺譜代端坊者太閤秀吉公御定の名古屋六坊の
中の瑞一也文禄元年秀吉公朝鮮征伐の時毛利駿河守元
春三男端坊順了と号れ名護屋御陣に於て格別御懇意也

折々却如小召々九々其連中々端坊。龍源寺。龍泉寺。淨
恭寺也。各古屋端坊境内。小六坊在。

善海坊 本勝寺 順海坊 安淨寺

龍泉坊 正圖寺 了善坊 行因寺

了休坊 傳明寺 永元坊 遷俗して今其末新町に有り
前書に安樂寺の坊に如何

名古屋端坊小お為て本願寺教如上人所度駕輿と入り水
し其格式して今小至。返本山々使僧有りといへり上壇の
翠簾拜前の手摺欄干等其依て待請有り是一通々寺格て
難成事と云り毛利家傳來の什物品々有り一系圖譯書亦
傳りぬ然を法第一保と云僧此一系圖を以て出奔し長
列小至り厚く用ひ強れりれ三年小して又出奔し義濃

因小至りし小葉小院有て居住に其頃行脚の山伏此寺小
雨伏志りこ小住僧出て何れの修験者に哉と尋れん
肥前国小城と答ふ折ふし雨類り小ぬり暫く休息しはる
に住持の曰小城といはる愚僧も同国也隣国唐津安樂寺
と知りや隨分知まり進委り語りんれ。此一卷を持出
大切成品ニ心得何卒遲滞なく唐津安樂寺へ届ヶ給ひ
れと頼れはふより受取歸着の砌安樂寺小送り届けれ抑
當寺本尊の御長二尺有五寸小して行基菩薩の作佛小く
此本尊其始天川村禪宗西光寺北本尊也然處西光寺の
住持へ示現し白ふ此示現と云は佛像の示現に有るは佛心に左様の心有りては尊の心を
是則人心の好む事は是れ方便の教其餘波のふを所也實は僧の意
明らけし。寧ろ此山林に隠居んより市朝小出衆生濟度をもへ
しと云り此故小則安樂寺へ其事を傳へ送りりはふ天川

村の人皆攀ぐ言ひける。聞ふらく御本尊ハ悉し行基の
作佛より西光寺傳來の本尊也。佛示現しぬふといへども
いふでか他の寺に送りたるや是非元々如く西光寺へ
迎ひ奉らん手段を窮む難く迎へしよさぬの支在
けむ。又安樂寺へ送りし也。此時安樂寺より本山へ伺ひ右
に訊きて本尊を迎へるに其以前御本山より下されし本
尊又此節右に訊きて迎へし本尊如何可仕やと伺ひしに
御本山より本尊ハ本勝寺へ送り行基の作佛ハ安樂寺の
本尊へ備へ奉りしと指圖に依て本山の家老宮内卿法
橋より安樂寺へ傳へりぬ。則本山より賜りし本勝寺
の本尊へ供へ奉りし也。

○東福寺

浄土宗

唐房村

唐津養福寺、末也此寺亦鎮西八郎為朝、墓アリ然レ為朝
鎮西ノ任アリ口碑ニ傳フ此地、縁アリ旧記等ニ見及ハズ其
館跡今人家廿八軒在テ祭ヲ為ス鎮西明神ト称ス故ニ
神社、部ニ記之

○教久寺

佐志村

此寺四方天祖馬守之陣鐘アリ銘ニ四方天祖馬守ト

アリ

○誓願寺

浄土宗

中興 平戸侯小君 菩提寺也

下松藩邸

平戸城下鏡川
寺領七十石

○光明寺

浄土真宗

觸頭

同城下

○本成寺

日蓮宗

同

○彌勒寺

真言宗

同 田平

○談議所

同宗

同 城下
寺領五十石

○卯山寺

同宗
寺領百石 三十石

同

○金鉢寺

同宗

同
寺領廿石

○樹光寺

天台宗
寺領百石

同



○雄光寺

臨濟宗

同
寺領百廿石

平戶慶

菩提寺也

○正宗寺

同宗

同

寺領百石

○普門寺

同宗

同

寺領百石

○瑞雲寺

禪宗

同
寺領三十石

國司公英大居士開基

○瑞岩寺

黃檗宗

同

寺領百石

○琴松明神社

祭神

郡^大君^大命^命
貴^命

松浦郡

浦河内村

右社内ニ佛像ニ躰有之如龙

○琴松菴地藏

棟札銘曰

謹奉建立琴松菴地藏厨子一宇先願乾坤道泰家歌有季
朝墊無為人々祝萬歲更祈檀信彌進武運長久僧侶清修
道福成就

檀那 鶴田上總及源賢

作者 宗徳公

天正十四年丙戌三月吉日

住持 桃察叟

○觀世音一坐在 庄屋宅地ヲ鼓溪ヲ裏ニ堂在リ琴松菴ト云

○瑞宮山慶龍寺

禪

中島村

今寺跡而已残ラ傍ニ觀音堂在リ此寺之本尊ト云佛

像銘曰

龔奉再興聖觀世音菩薩尊像

省大安五乙酉十月十八日肥前国松浦郡廣瀬村瑞宮山慶龍禪寺

當住持

融 宿

一説曰

牧瀬村ノ内ニ古ノ城ト云所在リ往昔橋ノ某此所ニ館ト描ヘ子ト残リて乱世ニ
戦没ル其子僧ト成リて一識ト号ス以則リ一寺ヲ建立ル自名ト取リて一識山慶龍寺

ト云大永七年、名書亦有リト云其後寺滅シテ右小堂残リテ寺屋敷田ト成リ

寺ノに寺井手寺春田堂園門前大門亦有六躰地藏在リ又浦河内村、長江

墓有リ橋氏ニ其年代も大永六年ノ銘有考ヘシ

○龍谷山瑞岸寺

禪宗

徳居村

波多參州公菩提寺云元來大寺ナリシク即今堂閣共ニ滅ノ寺跡而已残レリ

○龍谷山瑞巖寺

徳居村

波多三州公菩提寺ニ大寺也禪宗本尊觀世音牧溪ノ作佛ト云傳ス

○河上山殿原寺

即今寺号而已本尊残レリ小堂在リ

平原村

縁紀曰

肥前国上松浦郡草野庄平原郷根木觀音者松浦佐用姫之灵佛也往古宣化欽明兩朝之御宇高麗新羅背於我為征代大伴金村大連之長子狭手彦被遣三韓狭手彦到當国滯留之間以佐用姫為最愛之妾狭手彦發船之時佐用

姫慕別離登高山望其船流淚振袖招而詠歎故其山号領巾振山今鏡山是也其後佐用姫到此所終死其它取有大椿類族為姫追善代彼椿木以立根木五尺刻觀世音灵像依之號根木觀音建立一字曰河上山殿原寺當国北方之海邊有島名田島今日壁島爰在田島大明神之社并佐用姫之灵石此神者則崇祭大伴狭手彦也云云夫諸佛之感應雖無勝劣觀音之灵驗殊勝也大慈大悲之秋月無不照所三十三身之春花無不向所一運歩之葦成就二世之願望緣唱名者消滅當時之殃災孰不仰此菩薩乎
寛永五戊辰年九月三日
敬書

私考田島社ヲ以テ狭手彦ノ崇祭スルトハ其所謂ナシ然レモ殿原寺ノ事ハ三ノ圖繪等ニ載之其

縁無キニモ非レ歟一体杜撰ノ文意ナシトモ参考ノ為爰ニ書

○疊石山天沢寺 洞家 松浦郡 谷口村

○玉島山千福寺 同 岡口村

興聖寺 濟家 南山村

右三寺鬼城草野長門守永久所造處其寺皆絶今寺跡而已残レリ

○甘木山甘木寺 千々賀村

古昔波多家累代石塔守トテ真言宗ヲ建立有田五町被宛行シガ天文祿間波多家沒收以後修驗ト成リ甘木

○淨多坊ト云

醫王山 東光寺 相續村

内田山 淨聖寺 内田村

○心月寺 山本村

二ノ巻ヨリ入ル

○淨称寺

淨称寺焰魔法王ハ小野篁ノ自作也是本朝ノ二佛也一ハ洛陽ノ六道稱皇寺ニ在リ此寺弘法大師ノ開基ニシテ其始墓所也篁ノ像ヲ安置ル又別殿ニ焰魔法王有リ是篁ノ自作也篁六道ノ辻ノ冥途ニ通ルニシト謂ヒ傳ヘリ仁壽二年十二月廿三日篁卒去也篁ノ傳ヨリ以テ毎年七月九日十日諸人此所に詣フテ此寺ノ鐘ヲ撞ク槓北枝ヲ買フテ家ニ歸リ聖靈ヲ祭ル也俗ニ云傳聖靈此槓ノ枝ノ乘リ来ルニシフ珍皇寺ノ住僧言ヘリ此寺ノ鐘ハ慶像僧都是ヲ鑄ル此僧入唐ノ時留主守ノ僧小言ケルハ此鐘ヲ土中ニ埋メ三年ヲ経テ是ヲ堀出シ槓ノ掛テ撞クハ一ト裏僧小言置シハ三年ヲ待テ一年斗メシテ是ヲ堀出シ

浄多坊ト云
醫王山 東光寺 相續村
内田山 淨聖寺 内田村
心月寺 山本村
浄称寺 焰魔法王ハ小野篁ノ自作也
洛陽ノ六道稱皇寺ニ在リ此寺弘法大師ノ開基ニシテ其始墓所也
篁ノ像ヲ安置ル又別殿ニ焰魔法王有リ是篁ノ自作也
篁六道ノ辻ノ冥途ニ通ルニシト謂ヒ傳ヘリ
仁壽二年十二月廿三日篁卒去也
篁ノ傳ヨリ以テ毎年七月九日十日諸人此所に詣フテ此寺ノ鐘ヲ撞ク槓北枝ヲ買フテ家ニ歸リ聖靈ヲ祭ル也
俗ニ云傳聖靈此槓ノ枝ノ乘リ来ルニシフ珍皇寺ノ住僧言ヘリ此寺ノ鐘ハ慶像僧都是ヲ鑄ル此僧入唐ノ時留主守ノ僧小言ケルハ此鐘ヲ土中ニ埋メ三年ヲ経テ是ヲ堀出シ槓ノ掛テ撞クハ一ト裏僧小言置シハ三年ヲ待テ一年斗メシテ是ヲ堀出シ

樓小掛て是を以て小其鐘の聲唐土に聞ゆ慶像の曰本國
我寺の鐘の音此唐土に聞ゆ三年土中埋いて其後堀出
り時を以て六時小其音を出り金きに三年を待て
堀出せし事と大小歎きしと也七月九日十日聖靈の迎鐘
とて参詣の人是と撞きり是篋冥途に相傳の秘事也此珍
皇寺に一佛松浦の淨稱寺一佛也今松浦小如何成ル
故有て此佛安置せしやと尋し小洛陽の如きりに玄
空と云僧在り學窓小如くと眠りし小一佛枕元小立り
ひ善哉と汝此東谷小ひと川の辻堂在り焰魔法王を安置
き是小野篁の自作也今一佛同作有り建仁寺の南珍皇寺
の前殿に在り今西國に安置して衆生濟渡をへしと也則
夢覺て夜の明を待て其谷小至て見しに如き遠も此辻

堂を九の堂主も如し其村ノ夜毎の燈明を上げいり、を
印なし縁記も多し佛師を頼て別小焰魔法王を安置し其
古佛を守護して松浦小下りて後金剛法院小任職を此時
別殿を建て安置しり其後仁治年中此所賊徒の為に焼
失り其中小此焰魔法王堂斗り残り金剛法院再建寄附
小有て柱立を定むと云、時現住行衛知き凡出奔を後小沙
汰有て此僧還俗して尊宗親王征夷大將軍に任り如き時
猪多尾氏部大夫是也其後金剛院の寺号如し然處に此焰
魔王堂残りて辻堂の様成しを星霜を経て本尊として本
山の求めて淨稱寺と云ふ寺号を定む此時洛陽珍皇寺に焰
魔法王の事を引合せしに如き遠も此篋の作佛也と定む
日本二佛の焰魔法王也

○

養福寺

唐津 東寺町

延享の頃養福寺歸譽上人と云住持在或時學窓小書を讀
 ん及かきぬりと眠り夢に地藏菩薩顯きて曰是より
 西の方衣千山の麓に一々の岩窟有往昔此所小阿彌陀佛と
 供ふ立り今汝々寺小移らん事と願ふとの夢覺て驚き思
 ふ我信心せん執著の迷ひ成へんと打捨居こり翌夜又
 昏らけ其夢を見せし不思議小思ひ直小衣千山麓へと
 志して寺を出ぬ丁田村蓮池の邊ふて鷹見根右衛門と云
 人小逢ひぬ根右衛門言れれ歸譽上人何方へ趣ふぬ
 ふそと問ふ上人答へる我思ふ子細有て衣千山麓小趣
 んと根右衛門申れり我れ子細有て御寺に趣也此所
 より御寺へ返りぬへと云歸譽又去れは愚僧不思議の

夢を見、一夜斗り、さういさめ、み信まゝにおよそ、
両夜正しく同じ夢なす、い夢想の告げ疑ひ、
并地藏尊二昧衣、于山の麓の岩崖におを、
んと思ふ也、
其事を告人と思ふて、此所迄出浮、
阿弥陀佛と地藏菩薩と二昧往古より持傳へ、
夢中に告げ、
り不思議と思ひ、其事を咄、
来よりさうも右の佛像を送り参り、
へと誘ひて、則佛像を諦藝上人へ渡り、
佛供養ホの事、
像の作者を尋ね、
きと定めぬ、
ルへし、
彩色、
塵斗り彩色、
安置し奉りぬ、
云人信仰有りて折し参詣致さる、
帰依佛也

歸依佛也

○醫王山東光寺

相賀村

相賀村藥師佛ハ往古茅原浦今大村北云なる瀧上村建立在
 一佛像也脚長二尺小一て弘法大師の作佛也此寺濟家宗
 醫王山東光寺と号今相賀浦に移せる古事と尋るに兼安
 二辰年洪水て瀧上村崩れ落て藥師仏共ニ海中ニ入其後
 所々尋れれぬ更ニ其尊像を得れ三年を經て四年甲午海
 中小夜をく光りと見し人々恐れて近き寄る事能はれ只
 評議區々のこ也或時墨衣の旅僧何より来るとは知り
 其此浦に止宿して其海中の光を尋る事と聞て言ひ傳は正
 しく是佛作の靈佛海中より云はる斯うたゞ一世
 依在事也必其懼る所として其夜海邊に出て讀經せられ
 一にいやましの光り其邊に耀けり自然と浪静り忽ち尊

像顯れぬふ夫の夜の明了を待て浦人とし海中に飛入て
尊像を捧け遊れり則領主に訴へて小堂を出来安置し奉
りし也其由洲上村の聞付尊像を迎へんと望れれ共相賀
浦より来るに折此本尊弘法大師天曆五丙寅年ノ類
小無上の法を求めんとて入唐の志しを起し折し此尊
像に祈誓し何卒我小離塵の大善法を得させぬい、帰帆
の後一異を以て七鉢此尊像を作り奉らんと好く誓ひ
れしと也大同元年帰朝して阿字本不生の善法を得て終
小素懐を遂ぬへり是小依り則帰朝の後作らばし其七鉢
の中の一併也其餘の六鉢三州蓬来寺。攝州有馬湯山。讚品
北濱。因州鳥取。肥後法華嶽。筑前堅粕。今怡土松浦郡の境洲
上ニ安置し奉りし也兼安前後の項ハ鬼城草野氏鬼子嶽

波多氏二重嶽原田氏縁者よりといへとも取合度くよて
自然と織土と成り依故りや此相賀浦小移りゆひしより
今小至りて靈驗阿々小してさくの奇妙此事奉て筭
へらく猶又是し諸人小勸善懲惡の爲書載侍へりぬ
一文徳帝七御宇仁壽三癸酉年任職の盛嚴和尚熱病て露命
をよめく消へんと思ふ折ふし藥師佛白衣の老翁と化し
なひて惱む卧しる床の元小来りぬ此奇妙の藥湯を阿
々へぬふと覺へて和尚忽ち快なきり如何ぶ我人とも知
れさるれれハ藥師尊の助小や阿々人と思ひ拜し見まひ
藥の入る茶碗を手に持居ぬふと覺ゆ誠小藥師佛の助
け小疑ひあり感涙深く拜謝し侍へりぬ右の靈夢を感得
せりと古記小見へり

一天正十五年丁亥臘月上旬盜人大鐘を盗取ル水ハ諸方尋
也此ハ行衛知也凡同月下旬ニ至リテ相賀湊の間北濱
小怪敷聲有リ皆人行テ見ルハ鐘ハ龍頭ハ葉ハ纏ハ浪間
ニ浮沈シテ其氣色相質ニ帰リ人トハ音有リ有也由ナリ
是ハ依テ寺内ハ取寄侍リぬると云
一慶長元丙申年二月中旬寺澤志摩守 妙子鐘不子ヨリ聞
一石ハ唐津城ハ取寄時鐘ト云々由ハ七忽ハ音留リハ水
ハ佛意ニ叶ハスヤト相賀ハ送り返シタリヨリ古記ハ
見ヘミ

一後光嚴院帝北御宇延文三戊戌年八月八日大同元年丙戌
年ハ五百五十二年ハ當テ開扉有リ其後貞享四年丁卯年二
月八日ハ三月八日迄完帳在リト古記ヲ出タリ延文三年

ハ貞享四年迄三百廿八年ハ成リ大同元ハ享和元辛酉迄
凡ハ三百十二年ハ成也

二卷ヨリ入ル

○高城山法蓮寺

唐津 東寺町

法蓮寺開基 遠誠院日親聖人也歷代ハ再任職波多三河
守殿舎弟八幡坊日解聖人其項石志村高城山ハ在然ルハ
大久保加賀守殿唐津城主ヨリハ時城下東寺町ハ移テ大
久保家菩提寺の内也三寶祖師四菩薩四天王波多三河守
殿御母公ハ寄附其後住持日悟聖人再真當本寺房外ハ淺
誕生寺也

一當寺本尊御長一尺二寸ハ觀世音緣記添施主土井大炊頭

殿家中井上新左衛門此觀世音武藏ノ下綏ノ間火水ノ難
ホッパノ寄持在リ彼寺縁記ノ委シ此縁記并夢泡羅一
幅武列ノ明曆年中ノ大火ノ時寄妙ノ事在リ此故ノ燒殘
ヲ保所文字或人盜奉リ人ト云リほ小其夜ニキリ小眠リ
ルヨシ一其終小打卧夜明テ目覺ルルリ翌晚宵ノ盜ニ取
リ風呂敷包寺ヲ出奔セんと覺悟セ一に又其夜不思議成
リ於其風呂敷元ノ如ク一テ尊像ノ佛檀小直リ由ル
此僧懺悔一テ寺ヲ出ル

一日親尊像法弟日儀作尊像ノ後小銘在リ又師命に依テ是
ノ彫刻中と在リ近頃日誠聖人再興在

一此寺代々聖人紫袈裟紋白免許也寺格尤小一波多氏因縁
有ヨヨヨリテ爰小記

二卷ヨリ入ル

○内田山淨聖寺

内田山本尊ハ脚長一尺二寸ノ觀世音菩薩也人皇五十九
代宇多天皇仁和四戊申年弘法大師ノ御弟子真然大僧都
仁和寺供養ノ導師たりん事ト勅宣蒙リ離羣ノ大善法ヲ
修一南無大慈大悲念彼觀音力ト合掌シ我今仁和寺供養
成就ノ後尊像ヲ作奉安置一奉リんと祈誓一供養ノ後此
尊像ヲ彫刻一内殿終晝夜ノ勤經怠リなく真然僧都遷化
ノ後醍醐天皇ノ御宇昌泰三庚申年正月融大臣ノ御子左
大臣源ノ光ノ住々六條河原院樹上小金色ノ光リ顯ミ
一小ヨリ信心決定一テ拜一由ル此尊像小テ渡ルセぬ
之則抱迎ヘ奉リ松浦郡岸嶽ノ城主松浦波多治郎永ノ傳
ヘテ神田五郎廣一字ト建立一テ打田山淨聖寺ト号シ神

田の領主の代々の修理して又寺領在り然に大閤秀吉朝
鮮征伐の後波多三河守改易して上松浦一黨飛花菴葉北
有さぬて城跡ハ狐狸の栖と成り所々の神社佛閣其名
のい残て草むと成りぬ本尊の在り所ハささきなり
凡はれと此尊像ハ悉仁和四年の今享和元年迄
八百九十八年の星霜を歴代の中奇々妙々奉て算へ云々
し星轉り物変り堂塔破却して漸く假ハ小堂ハ在りとい
へとい廣大慈悲の奇特滅せん靈驗ハ云々成事誌云に違
みり凡爰に文祿年中大閤秀吉高麗出陣し為當國名護屋
の城廓を築きぬ時寺澤越中守の遺精を淨泰寺に移り
依て此寺堅固ハ永續し内田山淨聖寺往古ハ門脇ハ三男
萬靈の塔在り此牌面内田山淨聖寺了源と在是則當寺々
守りし僧成へし此尊像ハ縁記云々朽々集て文字
と合せ古鑑と琢磨して現世安穩ハ為敬ぶ書記畢

ニ卷ヨリ入ル
○觀世音

和多田村

世戸左衛門大夫守護觀世音菩薩今和多田村大庄屋屋鋪
小在此觀世音を佛作と云事を知て盜取京都佛師小持行
しに佛師ハ佛作と云事を知て高金を出して買取り大原
勝持寺の内ハ賣置り頃ハ後光明院の御宇承應三甲午
辛菴室の僧眠を催し佛檀の邊ハ居りしハ不思議成り
不此觀世音告てハ左ハよく肥前國松浦郡和多田村ハ安
置せし佛也盜賊為爰に來り今又松浦郡へ返りんと
願ふと云々以夢ハ覺り此僧膽小銘して覺り然れ及

我執行未^レ足^レマ^レル故^ニ心迷ひて夢見^レシカ^ニ夫^レ人^ト其
僂^ニ小居^レハ^ニ小翌夜^ニ亦右^ノ如^ク告在^リ佛師^トモ亦同
一^ク告有^リ佛師^ハ佛作^ト目利^セ故^ニ思^ハ様誠^ニ賊^ノ
持来^リ御佛買取^リて又高金^ニ賣奉^リ其罪輕^カシ
佛像^ヲ彫刻^シ余愛^シて世^ヲ渡^リ身^ガ有^ル事也
と大原^ノ勝持寺^ヘ至^リ去^リク^ノ物語^シル^レ菴主^モ此
夢想^ヲ得^ルと云^フ代金^ヲ返^シて御佛^ヲ抱^テ参^リせて我家
小返^リぬ又不思議^ニ成^ル事在^リ和多^ノ田村^ノ名頭^ノ夢想^ヲ得^テ左衛
門^ノ太夫^ノ末葉^ノ其村^ニ在^リ是^モ同^ク夢想^ヲ有^リ六月十七
日^ニ必^ズ歸^リ水島^ノ邊^ニ出^テ迎^フと正^シく告
け有^リれ^ハ去年^ニ失^セぬ^ハ心懸^リ成^リシ^ニ今^ニ此^ノ夢^ノ
御告^ケ蒙^リ事^ハ有^難き^ト其所^ヲ者^ニ物語^リル^レハ

彼^ノ乱心^シ杯^ト云^フて笑^ヒぬ其事^ハ名頭^ノ聞^キ
典^六と云^フ者^ノ家^ニ行^ク告^ケ蒙^リ左^ノ北^ノ
双方^ヲ替^フぬ御靈^ノ夢^也人^ハ免^ル云^フへ六月十七日^ヲ待^テ二
人^世小忍^ヒて満島^ノ洲^先小出^テ船^ヲ来^ニと待^居る^ニ
程^{なく}一艘^ノ船^洲口^ニ帆^ヲさ^ケて入^津志^ルり向^テ船^ハ
船長^トた不^レ者^若苦^ヲ列^テ云^フハ夫^小二人^居る^ハ
若^シ和多^ノ田村^ノ人^トて^ハなき^ヤと問^フ二人^吞て其^ノ尋^ル
る^ハ子^細ふ^レゆる^ハんと云^フル^ハ和多^ノ田^ト云^フ所^ノ人
よ^テ用^事有^リとて端^船を^托して其^ニ人^々元^船
小伴^ハぬ切^船頭^申様^京都^佛師^ノ脚^頼ノ^親世^音再^興出^来
此^船小^乗せ奉^リ夫^ハ不思議^ニ成^ル事^在夜^前夢^見正
しく此^ノ親^世音^我枕^元に^立ぬ^ハ明^十七^日着^岸と^和多

田村と云所の者出迎ふべし早彼者に渡りて此舩返り
来りといへども是因縁ゆき故也高賣繁昌舩中安全を
守るべしといふと夢見て覺ると語りぬれ二人と
始め舩頭も有難く涙を流しぬ夫より一禮述て宿所返
り運賃を持参して又舩小行れば運賃とて是非と
断りて去ふより其後亦て歸りぬ此訖聞より所の者
以来殊更尊敬し奉り事也

二巻ヨリ入ル

○日生山心月寺

山本村

波多三河守親公前室心月瑞圓大姉ヲ葬埋し奉りし所
一寺と建立しぬ墓所本堂本尊下也則此寺の開基有り
元和二丙辰年志列公再換地有り乱世の砌て郷方書記得
たり者稀也換地の節心月寺住持を頼り水帳を書きし
其節寺澤公庄屋座の座敷に心月寺を呼出し諸事尋物語
の上寺附の持地の分、田畑地味の位と下り送り也
心月寺什物

瑞圓大姉の琵琶

夢中飛入の觀世音

瑞圓大姉の懷釵

瑞圓大姉の操珠教

波多相模守の鎧
天皇傳來苦行の釋迦

ニノ巻ヨリ入ル
○清水觀世音

石志村

清水伴豆守 守護佛此所ニ清水の館と云所有り

ニノ巻ヨリ入ル
○奥之坊

蕨田村

岸嶽城始より祈禱所也此所ニ中津町鉄炮町隱水蓮華院
極樂院蓮御寺厨別當蓮池厨坂皆蕨田村の内不在古跡也

ニノ巻ヨリ入ル
○圓通山常安寺

岸山村

禪宗濟家今井新左衛門尉 の法名常安居士の園基也

ニノ巻ヨリ入ル
○寶龜山建福寺

大川野村

此寺跡今大川野村御茶屋屋鋪也往古ハ真言宗にて日在
城の祈禱所也靈々々々寺ありしに日在落去以後自然と
寺崩じ其後田代可休と云ふ者の柵と成りし小可休無失
の罪にて長野原ニ於て御仕置し仰付り此夫ノ庄屋宅と
なり志州公惣庄屋取立カ節初て平山村庄屋十五左衛門
小下され其後寺澤兵庫頭御代御茶屋と成元寺地の事故
諸山修驗者等小祈禱と仰付り此て地形を仕替へ定奉行
相誥へく差圖在之改て普請成就せりと也

48580

0791

15册

16-1



